

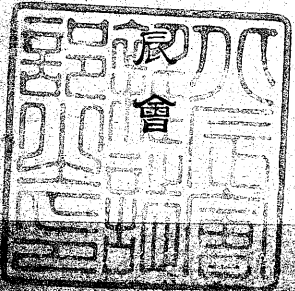
明治三十二年六月二十七日發行

(非賣品)

北辰會雜誌

第貳拾四號

第四高等學校北



北辰會雜誌第二十四號目次

論 說

戰爭論(承前)

扶搖生

史 傳

史海指鍼(承前)
橋本左内(承前)

浦井恒堂
文 漪

雜 錄

哺乳動物壽命測定法
俚諺雜話
日本文法に關する重なる書籍
松風煙雨

市村塘
紫 影
武笠三
彷徨生

文 苑

Ode to the Daishi Koto Gakko.
胡蝶錄
汲井輪
友に贈る

De. Haviland.
花 樵 人
花 樵 人
朗 月

和歌 俳句

記福島中佐遠征事

雜說一、二、三

雖在鎡器不如待時之解

漁翁之言

望江南外二首

詩五首

批 評

第二十三號概評

綠東野人

雜 報

迎夏辭○杜鵑啼血○青年歌文會を戒む○頑固者
流と戒む○西村茂樹翁徳育談○寸鉄數件

附 録

春季弓術大會○湊安宅海濱演習記事(碧水)

村上函峰

明石華陵

竹 溪

樵 谷

金井秋蹟

北辰會雜誌第二十四號

論 說

戰 争 論 (續)

扶 搖 生

嗚呼、天下不義の徒を驅りて之に不仁の器を授け之に教ふるに人を戮すを以てぞ、日變じ、星隕ち、山崩れ、河裂く、宗廟祭られず、生民息まず、一念戦争に及ぶ毎に、吾れは未だ嘗て悚然として畏れ、慨然とし歎せずんば非ざる也、然り而して上下三千載、東西三千万方里、土を割し、民を分ちて邦國を建つるものは言ふを俟たず、山海僻陬の處、蠻貊夷狄の間、苟くも人跡に到る限は、何處として搏噬狼呑の酸も目撃せざる無きは何ぞや、危然たる世界史の一卷、何れの頁として鮮血の斑々たらざる、又何れの頁として硝煙の臭を留めざる、請ふ吾人をして試に、今世史の汎濫たる濁流を遡りて、幽昧ある各國創世紀の傳説に耳を傾かめよ、夙に秀麗あるオリンプス山脈の下、明淨ある多島海の中心に此國を起して、藝術の典雅なるを樂み、詩歌の幽韻あるを歌ふて、後代民人の靈性に、パンと水とを供給しつゝあるもの、之れ希臘の人民に非ずや、而も彼等はトロイの皇子パリスを爲に、メネロウスが宮裏の佳人、ヘレンを理もかく奪ひ去られて、端なく列國の笑を買ひし時に當り、彼等は何を以て其暴殉を懲らし自家に面目を保ちしや、實に武器を以てせしに非ずや、彼れ照々たる休明に腹を鼓して歌ひし幾多の英雄は、今や赫怒し

て起てり、骨は鳴り、肉は躍る、此恨鮮血を見ずんば、癒やせ可らず、彼等は直に鐵艦を絶海に
 飛ばして、ダルダチロス海岬を渡り、電撃電撃、一舉してトロイ城を抜かんとせ、何ぞ夫れ盛
 なるや、爾來風霜を冒し、寒暑を凌ぎ、トロイ城外の陣營に起伏して、具に白刃の苦を嘗むるよ
 ど十年、若し夫れ鬱勃蟠踞したる敵愾の氣象、若しくは燦爛たる英雄の事業は、當代の國民詩人
 ホーマがイリアットに詩篇に残す處なしと云ふ、羅馬に在りては、軍神マルスを崇拜するものと甚
 しく、爲に美麗なる堂廟を建て、妙麗の處女ベスタ、ヴルチンなるものとして祭器を守らしむ、
 彼の羅馬市を建設して、羅馬帝國の基を創めたるロミュラスは、即ち彼の軍神マルスとベスタ、
 ヴルチンのレヤ、シルビヤとの子なりと言ひ、若しくは羅馬人自づマルスに兒と稱して得意の情
 あるを稽ふるも、當時如何に此人種が尙武勇烈の民なりしやを知るに難くらざる也、其他印度鬼
 神傳には温厚なるブラミン人種と、兇殉ある他人種との争闘あり、ヘブリユに傳説には、セトス
 の後裔と、ケインの末孫の衝突あり、或はスカンデナビアの鬼神傳と言ひ、或は吾が日本の神話
 と言ひ、吾人に語る處のものは、何れも平和の歌に非ずして鉦鼓の響あり、豈唯だ幽昧なる創世
 紀れみと言はんや、中世紀且つ然り、豈唯だ中世紀のみと言はんや、近世紀に到るも依然として
 變せざる也、之れ猶ほ驚くに足らず、彼れ和平を地に下させ、福音を齎して、此世に來りたる
 宗教家が、已れ既に業に此福音に背戻して視面にも羽箭を飛ばし、白刃を簸弄す、之れ豈驚く可
 らずや、看よ、マホメットは回々教の聖祖なり、彼や効名の熱火早く水の如く消え、心常に人世
 の濁浪に翻倒せざるゝを苦しむ、年四十にして、家を出で、ヒラ山に隱栖し、觀念の眼深くアラ

一神の莊嚴に感ず、自ら謂らく、吾れは之れ神聖なる真理を感得したる豫言者ありと、此に猛然
 として救世の大望を起し、山を去りて虚曠閑寂の野に漂浪し、或は巉巖に峙ち、或は洞窟に潛み、
 屢々異教は毒手に陥らんとして、而かも屢々免れ、以て彼の本願に向つて驀進せり、彼の目的や
 ヘラクリアスの冕旒に非らず、コスロエスの金笏に非らず、否、之等は彼に取りては實に塵垢糝
 糠の値に過ぎざりし也、彼の目的や實に天國に在り、智慧にあり、衆生の疑惑を洗滌するにあり
 き、之豈天下の尤も偉にして且つ大なるものに非ずや、而かも彼は其宗教を宣傳するに當りて
 は、訓誡説明の平和的手段に依らずして、劔を以ていき、彼自ら曰く「コーランや、貢や、將た、
 劔の」、「爾は戰鬪の熱火の畏る可きを知りて、地獄の業火に更に熱さを知らざる乎」と、斯くて彼
 は、此手段を以て偶像教を撲滅し、民俗の腐れるを一洗し、十年を出でずして、早くアラビヤ半島
 を克服し、馬首一轉、將に歐洲に入らんとして、哀れむ可し、熱病に斃れぬ、基督教に在りては、
 クライスト自らは、流石に圓滿清淨の徳四方を風靡し、未嘗て鮮血を流して、自ら犯罪の人た
 りしが如き愚を學ばざりしと雖、クライストより使徒に到り、使徒より法皇に到るに及び、其徳
 漸く微、其威愈々薄し、歴代に法皇は純乎たる俗界の人、或は佛蘭西と手を結び、或は獨逸と交
 を盟ひ、宗教的に、政治的に、好んで權謀を施し、術數を盡し、自家の爲には何等れ殘忍手段を
 も厭はざりき、宜し、法皇自ら法服を脱ぎ去りて、三軍の統領たる如きは極めて稀なりしと雖、
 一朝寸毫の吾れに快なきものあらん、彼等は直に、宗門の積威を借りて列國に蒞み、之を
 煽動し、之を使喚し、恰も傀儡師あるの如く、之をして吾が饜饕の志望を満足せしむるのイ

シストウルメントと爲せり、斯くの如きは、苟くも中世紀の史を讀むもの、知る處にして、必ずしも余輩の論に非ざる也、讀者若し疑はば、去りて偶像破壊説の争亂を按ぜよ、僧位褫奪の騷動を檢ぜよ、然る後十字軍の歴史に及べよ、必ず思ひ半ばに過ぐるものあらむ、斯くて中世紀の亂脈なる、マホメット、ホープをして生きかたが殺人の鬼と化せしめたり、其後天下の勢俄然として一變し、積年の兵革は其反動を呼び起し、コシスタンチノポールは全滅は古學の伏魔殿を裂開し、此に希臘の文明は燦然として光彩を四方に放てりしが、哀れ、平和は賢人の夢にして、戰鬪は人類永劫の歴史なるか、世は再び刈菰と亂れ、佛蘭西は尤も其高點に達し、白日青天の下、衆人環視中、ルイ十六世は弑逆は業耻を受くるに至りて、天下の事益々急促に、此にナポレオン、ボナパルトは赤手コルシカに起ちて、大陸の風雲を翻亂し、列國を闕下に羅致して、覇者の權を掌るよと年あり、而りも霸業久しからず、彼は須臾にして、枯涸落滅、遠島に流竄せられて、歐洲は漸く小康を得たり、近世に到るに及び、妖雲全く跡を收め、怪雨久しく降らず、あらゆる平和の機關、貿易商業の如き、文學藝術の如きは、空前絶後の發達を成したり、眞に之れ、鎧を抜き、劍を投じ、緩歌曼舞す可きが如しと雖、之れしかるが、盧生の夢のみ、風前の燈火のみ、看よ、看よ、列國は平和的外装の裏にありて、盛に戰亂的潛勢力を養成しつゝ、あるに非ずや、言ふ勿れ、露帝が解兵の提議を、彼は之れ、齊桓晉文仁義を借りて、人の口を箝せるの徒、龍動タイムスは冷笑して言ひぬ、「ニコラス皇帝の御諱と、其御治世の御譽とが後代に人民に記憶せざるゝ位ならん」と、亦言ふ勿れ、米國がモンロー主義の宣言を、彼は玖馬獨立てふ美名の下に、如

何ばかりの不義を働さしや、嗚呼、嗚呼、觀ずるも武力の世なり、觀せざるも武力の世なり、何等の痴漢ぞ、白日鼯睡して、ユートピアを夢みんとするは。

近時佛蘭西の博士、ミシニル、ルヴォン氏一書を著す、邦語之を譯して戦争哲學といふ、其文辭は閑雅婉麗あるが爲に、幾分の論理の明快を欠きたるやの恨なき能はずと雖、滔々數千言、論じ去り論じ來りて、最後の斷案を加ふるに歴史の鐵槌を以てせられしは、子輩の感服に堪えざる所、而りも氏の所論や、餘りに理想的あり、宗教的あり、勢國家を蔑視したるやれ傾き能はず、思ふに戦争の如きは、之を眞理問題としてよりは、國家問題として、出世間的よりは、世間的に之を論ずるの安且つ切あるものに非ざる乎、余輩は今具に戦争の恐る可く、悲しむ可く、史家は所謂「眼を閉ぢて累歎し、聲を放つて流涕すべきもの」あるを論じたり、然れども、神明の大慈悲なる、豈徒に不仁不義の器を地上に投じて、衆生を永劫に苦むるものぢらんや、戦争夫れ慘は則ち慘ならん、悲は則ち悲ならん、而かも其間一點の光明無きもの、美の要素なきもの、請ふ余輩をして、其黒幕を脱落し、背面の光景を觀せしめよ。

戦争と權利と。

x x x x x x x x x x

權利に客觀的と主觀的とあり、客觀的權利とは、則ち其國の政府が明に承認する法律を指すものにして、公法といひ、私法といひ、民法といひ、刑法といひ、名は異かりと雖、其能く國家の自

主獨立を保存し、民庶は福利安寧を謀る所以に至りては即ち一あり、然れども客觀的權利や、形式に過ぎず、名目に過ぎず、能く之をして活動の妙あらしむるものは主觀的權利なり、主觀的權利とは、各國々民が其國家に對すると、一身に對するとに論なく、苟くも其專有する權利は、確乎として之を把持し、何等の牽制も他より受くる勿らめんといふ自主的觀念にして、今日各國の燦然たる憲章法典は即ち此自主的觀念の產物に外ならず、世の賸々者流動もすれば、立憲の美を説き、共和の眞理なるを論じ、吾が國民の情性を顧みず、直に採りて以て吾が有となさんとす、而くも一言の主觀的權利に及ぶを、之れ畢竟本末を顛倒し、主客を轉換したるもの、主觀的權利は第一あり、客觀的權利は第二あり、夫れ泰山の峨々として千仞の高きを爲すものは土壤あれば也、黄河の混々として晝夜を止めざるものは水あれば也、今夫れ、土壤なくして泰山の高きと求め、水なくして黄河の混々を望む、觀る者以て笑を爲さん、主觀的權利は土壤あり、水あり、客觀的權利は泰山あり、黄河なり、去れば今日、國家が宇内に樹立して、能く其体面を汚がさず、輕笑を買はざる所以のものは、實に此主觀的權利を抱擁して一日も忽にせざる國民あれば也、此權利的思想や、國家の生命なり、血脉あり、小にしては個人の獨立を維持し、大にしては國法を防禦するの具となる、彼の羅馬が羅馬として、人文史を濶歩する所以のものは、敢て七丘綿亘たる間に起伏する燕遊臺樹の壯麗なるが爲にも非らず、又彼の西は波荒さイギリス海峡に至り、東は印度河畔椰子樹の絲蔭に、其境界線を廣げたる、老なる版圖を有せしが爲にも非ず、實に其國民の心理に徹底する、權利的思想ありしが爲に非らずや、思へ、彼等は時のパトリシヤンに矯

慢にして暴逆、生馬の眼を抜き、生血を絞りて猶は飽き足らざるに憤を發し、老若男女相率ひて聖山に走りたる、紀元前四百年代の大椿事を初とし、爾後幾たびの法律の爲に鑿鈕を抛ち、鮮血を踏み、嘗て一日も怠慢の色無かりしに非らずや、彼の十二法典と言ふもの、若しくはシニユス法と言ふもの、其他幾多の法令條項は、彼等に取りては神聖にして且つ名譽なる分捕品と言ふ可し、後年羅馬が、戰勝之餘威に乗じて、破天荒の領土を開き、而のも散漫不統一ある、アレキサンデルの二の舞を爲さざりしもの、奚んぞ此等法典の賜に非らずとせんや、羅馬は言はずもあれ、瑞西の如き、白耳曼の如き、和蘭の如き、最爾たる領土を以て、山嶽河壘に間に介立し、能く列國と鏖を連ぬるのみならず、富の度に於て、兵力の度に於て、敢て或は一步之等に駕せんことを、之れ其權利的思想の赫灼たる發達に由るものあること、苟くも史を讀むもの、會心する處ならん、宜し、邦國は小なりといひ、此權利の思想あり、彼等は最早モナコ國に非らずして、嚴然たる覇者の國なり、夫れ權利の尊むべき斯の如し、是を以て、如何にして此權利を保護せん乎は、屢々、否、常に忠實ある國民の念頭に往來する問題にして、歴史の吾人に教ふる所も、又如何にして此權利を防禦せん乎は解釋に過ぎざる也、然りと雖、權利あるもの、貴は則ち貴からん、而のも之れ理論のみ、治力に非ざる也、若し吾人にして、此理論を主張せんとするば、夫れ自らの外に、尙ほ之を幫助し、其目的を遂げしむるの實力が、甚だ要あるを見る、何をの實力といふ、戰爭之れあり、希臘の詩人、ヘシオドが寓言に稱す、隼鷲の羽風を斬り、來りて黃鳥を撃つ、黃鳥曰く、「汝奚んぞ暴あるや」、隼鷲の曰く、「知らばや、腕力は之れ權利なる」と、此論誠に微ありと雖、

個中無限の眞理を含蓄し、覺えず比公が、「力^〇は^〇權^〇利^〇」前^〇の^〇もの^〇の^〇あり^〇」の妙言を想到せしむ、げに震雷無くんば積陰開けず、鋤犁をくれば何を以てう荆棘を絶たん、宗教は如何に未來を説くとも、哲學は如何に平和を説くとも、苟くも、迫害に於て世に絶ぜざらん、吾人は個人として三尺の秋水を枕頭に離す可くざる也、國家として甲仗の修繕を怠る可くざる也、然り而して、彼の憎くむ可き迫害は、猶ほ惡魔に世に跳梁するが如く、暗黒の光明に伴ふが如く、一日も閭外に驅逐する能はざるは、歴史の吾人に語る所、運命の亦如何とも爲と可くざる也、且つ夫れ、權利の產物たる法規典章の如きは、其時勢に要求に應じて顯出したるもれにして、決して絶對的のものに非らず、吾人は時勢に進歩と共に、適宜に之を擴張し、改造し、若しくは之を廢撤し行かざる可く、然らずんば、此等の法規典章は幾ばくもなくして、活動の氣象を喪失し、毫も運用の効を致さざるのみならず、若し一步誤れば、廟堂の上に翱翔する權姦の輩、之を利器とあり、之を爪牙として妖孽を爲し、不測の害を無辜の民に及ぼさん、法規典章の改革は夫れ一日も怠る可くざる也、然りと雖、舊法に戀々として、新法を畏懼するは凡俗の常情、況んや、依て以て吾が血を肥やし、吾が腹を膨らかさんとする之等鼠輩の、あかゆる手段を盡して固守せんとす、改革は誠に一大難事、能く之等鼠輩を掃蕩して、風氣を一新し、國民の迷信を醒覺せんには、赤手空拳の能く及ぶ所に非ず、必ず血を流し、骨を積み、百難千難、山の如く來るも、一步退のざるは勇氣と、實力とありて、然る後、初めて其成效を期すべき也、法律の更正も是に至りて望むべく、舊法の廢棄も是に至りて達すべし、即ち知る、戰爭は權利の死活を決する最後の判決者なるを、戰爭の

敗北は、權利にとりては、實に死刑宣言の響きたる也、然るに、歐にサダイニ、アファなる者あり、其説に曰く、吾人の權利は、斯くは如き殺伐ある手段を以て、得らるべきに非ず、權利や、猶ほ文法の規則の如し、論理の法式の如し、自然に發生し、自然に進歩す、其間何等吾人の干渉焦心を要せず、宜し、吾人が周圍の事狀よりして、或は一時の滯滯を來し、或は紆餘曲折の路を取ること無きに非ずと雖、要するに、之れ發展の中途に於ける一小現象のみ、何ぞ憂ふるに足らん、吾人は寧ろ、甲冑を脱し、劍戟を委し、拱手以て權利の進歩を俟たんと、蓋し此論や、權利の濫觴に關し、其見解を異にせしより起りたるものにして、論者一個の說としては或は可ならんも、吾人は滿腔の熱誠と勇氣とを揮つて、權利の防禦を勤めざる可くざる今の時に當り、此逸樂説出づ、或は恐る、年少の輩の誤を爲さん、彼は太古幽昧にして、人智の未だ微ある時に當り、權利の既に業に存在するを見て、速断して曰く、權利は天資ありと、之れ明に根本的誤謬なり、吾人は思ふ、彼原人々代にありては、權利の競争は今日よりも一層甚しきもの有りからん、之れ吾人が祖先の歴史は、常に日出で、作り、日入りて息し、井は鑿りて飲み、田を耕りて食ふ、帝力吾に於て何か有らんの、雍々たる和樂の歌に非ずして、部落相犯し、郷閭相牆ぐの酸たるエビツクある所以にして、若し世に權利の争闘をからんには、如何にや野闊うらまし、而も遂に國家を如何にせん、吾れ聞く、英國の北方、北氷洋に瀕し、一孤島あり、アイスランドといふ、山澤敢て博大をあらざるに非ず、壞地敢て瘠薄なるに非らず、而して、悠々數千載、坤輿の輿國は、早く野蠻の域を擺脫して、燦爛たる文明の光彩を放ちつゝあるに係らず、此一島は、依

然として草味亂離の人たりと、之れ蓋し權利に迫害なるもの來らず、從ふて之れが防禦の觀念なればあり、昔は桑氏の君、法を修め、武を廢して其國を亡ぼし、今は獨逸の國、鐵と血との政略を以て、百萬方哩の版圖を開く、古今一徹、東西渝らず、鮮血する哉、鮮血なる哉。(未完)

Praise is the daughter of present power.

Swift.

史 傳

史海指鍼(續)

浦井 鏗 一郎

羅馬時代と中世時代とを連鎖を爲る最も大切なる歴史は有名なるギボンの羅馬衰亡史あり此書種々たエヂシヨンあれど普通に行はるゝはミルマン出版六冊の者とす

エドワード、ギボンは一七三七年サレ洲プロトイに生ずる氏の祖父は有名なる投機會社なる South Sea Company の支配人にして此會社の破産に際して其資産は過半を失ひ家道失墜するに至れり氏の傳は自著の Memoirs of my Life and Writings に詳かり此メオアールは氏が五十二歳既に羅馬史の編纂を終りし後に書ける者にて氏は此書に序して曰く余の名は將來英國名人傳 (Biographies Britannica) に載せらるべく余は他の何人よりも余の思想の變遷及び余の行蹟を叙せるに適せるを

思ふと氏のいふ所に因れば幼時氏の體格からず教育も不規則にして一七五二年オックスフォードに入學せしりとも正則の學業を怠り好みて歴史紀行類を讀み殆んど食を廢するに至れりと云ふ氏は大學に在る僅に十四月にして退學せしが其際氏は羅馬舊教に歸依したるに因り氏の父は之を喜ばず氏を瑞西なるカルビン教牧師の許に托し氏は再び新教を奉ずるに至れり後國に歸り一七五九年より七〇年までハムプシア洲民兵となりコロチルに進む氏之をメオアールに記して曰く現代兵法の大隊運動は余をしてフハランクス及びレジョンに關する正確なる觀念を與へたればバムプシア精兵(好諧謔)の士官は羅馬帝國史の著者に不似合とはいはれまじと一七六三年正月より一七六五年六月まで瑞西佛蘭西以太利に遊びしが羅馬に城趾を訪うて懷舊去る能はず突然羅馬史を編むことの志を興すに至れりといふ氏自ら記して曰く余れ羅馬に在るや一七六四年十月十五日の事ありき余はキャピトルの舊蹟に座して憶古の情に堪へざりしか跳足なる憐れ氣ある僧侶共れジュピター寺院に詣で夕の祈を行ふの聲を聞き感極まりて泣きいで此市の衰亡史を編むことの考心に浮びぬとされば始め氏の考は單に羅馬滅亡のみを記する者ありしが勉強研究の結果知らず知らず其範圍の膨脹して帝國史を編むに至りし者を見ゆたり氏は修史に従事すると同時に國會議員たるものと八年而して此長時日に於て氏は一度だも演臺に昇りざりといふ氏は之を説明して曰く余は達辨ある演舌を聽きては及ばざるを思ひ拙劣ある辯論を聽きては已も亦た嘲笑を招くことを恐れたればありと一七七六年羅馬史第一卷公にせられしより氏の名聲一時に揚がり一躍して文學社會は牛耳を執るに至れり一七八三年瑞西のルーナンに隠れて専ら修史の業に従事し一七八七年

六月廿七日月明の夜十一時より十二時までの間に全部脱稿せりといふ氏が其際の感情を寫せるの文は最も人口に膾炙す一七九三年英國に歸り翌年没す齡五十八史家ニーブルの評に曰く

The greatest achievement of human thought and enlition in the department of history.

と蓋しギボンの歴史は凡ゆる歴史ヒストリカルリテチャー文學中最も完全ものなることは學者の定論にして今余輩の喋々する迄も無く其記事は極めて正確其文章は最も美麗にして其簡潔はスキデニスに及ばず其史眼はタシタスに譲ると雖も大に前二人を凌駕する所以の者は其規模の雄大なることにて其記する所上下千數百年古代より中世に及び東洋と西洋とを聯ね東は支那より西は英國北シベリアの野より南サハラ沙漠に至るの地は盡く彼の筆に上れり加ふるに讀んで興味ありて恰も一部の小説を讀むが如き感あつて一讀卷を措く能はざらむされば苟しくも史學に志ゆる者は勿論多少の閑暇ある人は有害無益の小説類を閱するを廢し一部のギボンを繕かれむことを望まざるを得ず古者阿典なるプラトローのアカデミーの入口に掲示あり曰く Let no one enter here, till he is master of geometry と余輩は學校は戸に記していはん Let none enter here, till he has mastered Gibbon と特此書の壓卷と稱せらるるはアントニネス兩帝時代に至る羅馬帝國の大勢を論述せる初三章にして其他著名なるはコンスタンチン帝及耶蘇教會設立の章(第十七章)セオドリクス大帝(第三十二章)より三十四章野蠻人の耶蘇教皈依(三十七章)セオドリク大王(三十九章)ジュスチンアン大帝(四十章)乃至四十二章(羅馬法典編纂(四十三章及四十四章)等にして此等の章は必ず一讀するを要す而して猶餘力あらば查理曼大帝(四十九章)マモット傳(五十章及五十一章)十字軍(五十八章及

九章)土耳其人の勃興(六十四章及五章)コンスタンチノール府攻撃(六十八章)及び羅馬市を記する最後の六十九章乃至七十一章を讀むを便とす

前述ギボンの羅馬衰亡史は中世時代に論及すれども中世史研究者は決して之を以て満足すべきにあらざるは勿論なりされど中世時代は萬國史中に於て最も困難なる時代にして封建社會と耶蘇教會と相對峙し一方に王國の建設あれ一方に教會の組織ありて此社會の二大系統は東モレアより西ブリテンに至る中央及西歐羅巴に普及し幾多の王國侯國は何れも封建制度を行ひ羅馬加特利教を奉りて極めて調和ハーモニアス的なると同時に此等は皆特殊の地方的中心と獨立の國史卿士史を有するを以て中世時代の歴史は彼此混合し易く之を論ずる簡なれば則ち要を得難く之を記する詳なれば則ち煩に陥り歴史家最も困難を感ずる所なり故に此時代に關して最も明瞭なる觀念を得ること難き業あれと先づ最良の方法といふべきは直に多くの中世史の引用せる泉源ソースに溯り多少の勞を厭はずして一時代の範式タイプとなるべき最良の著を撰で之を精讀するに有り今試に其二三を擧ぐれば

(一) Eginhard (Einhard): Life of Charles the Great

此人は中世時代の最も有名なる傳記者にしてビビン時代の末に生まる幼時より查理曼の宮廷に入し當時の大學者アルクインの教を受けしが彼れ英才博識は大に大帝の信任を得て其秘書に任ぜられ常に大帝の遠征及旅行に隨行して暫時も其傍を離るゝを許されず彼が大帝に侍せざりしは大帝の命を奉りて羅馬法皇レオの許に使せし時のみなりさといふ大帝崩するの後大帝のネルイ、デボネリアの子ロテアは師傳となりしが後致仕してマイン河畔なるムールハイムの町に隠れ一寺

を建立して之に居り終にミユールハイムを改めてゼトリゲンスタットと爲せり蓋し天幸の町の意なり此時以來彼は其愛妻と約し以後は彼の妹として待遇することゝあし落飾して僧となり八四四年を以て没す彼の傑作として中世の文學に一光彩を與へしは查理曼大帝の傳(Vita Caroli Magni)にして八百二十年脱稿す其体裁文章共に宜しきを得中世史に關する最も大切の史料なり此人に關して人口に膾炙する奇譚は彼の妻エムマは查理曼の女にして深く彼を戀ひ慕ひ一夜竊に彼を其室に招き喃喃情を語る會々天大に雪を降らし激に積ること寸餘に及び彼は忍び出でむとすれど足痕を印するを恐れ窮すること甚だしエムマは意を決し婦人の足痕あつた異するゝあきと思ひ情人を負ふて庭より送り出だす查理曼は雪明に因り之を認め失笑禁ぜず終に兩人の結婚を許せりといふされど其實彼の妻エムマはウーラムスの僧正の妹にして查理曼の女にあらず此話は後世の虚構あるや明なり此書は譯書は一八五〇年出版アベル氏に獨譯を以て最良とす

(二) The Saxon Chronicle

一名アングルサクソンクロニクルといふ古代英國の記録にして極めて有名なる者なりジュリユスシーザアは英國侵入より引續きて一一五四年ステッフエンの死する迄を録し蓋しアルフレッド大王以後多くの僧侶が其見聞を綴りし者にして其一部はアルフレッドの筆に成れりといふ此書はベネブレルベードの英國宗教史と合して一冊としポーンのアンチクエリヤンライブラリーに收めたり又單に此書の体裁を窺むとならば我校所藏チエムバア氏に英國文學辭典の下卷附録に此書の一節を抜萃し之に對譯を加へあるを以て就て見るべし

(三) John Asser: Life of Alfred

此人はウエールスの僧にして古記録には拉丁名を用ひ Asserius Menevensis としヘリアルフレッド大王の名を聞きて朝廷に召出し就て學べり前述のサクソンクロニクルに據れば九〇〇年に死せりと云ふ此書の本名は Annals rerum gustarum Alfredi Magni sive Saxonum 文庫にては Six Old English Chronicles の内に收む

(四) Chronicle of the Crusades

佛國貴族 Geoffrey de Vinsauf が實地見聞せる英王リチャードの十字軍に於ける事業及び John de Joinville が佛王サン、ルイに關して見物せる記事を集めたる者にして十字軍に關する大切なる史料なり亦たポーン文庫に收む

(五) Froissart's Chronicle

此人は French Herodotus とい稱あり中世の終にける詩人兼歴史家にして彼は恰も今日の新聞探訪者の如く歐洲諸國を漫遊し至る所上下貴賤に交を結び其談話を聞き之を筆記せる者にして其記事は百年戦争に關する者多しされど此人は大歴史家の才を有するにあらずるを以て其記事も批評的ならず其弊は事物の真相を示さずして寧ろ其外觀を寫すにありされど公平に其見聞せる事柄を記せるを以て亦た以て當時代の大切なる史料なりとすルートレッツのポビユラアライブラリーに收む

(六) Commynes, de Philippe: Memoires

此人元フランダアの貴族にしてバーガンヂイ侯查理、セ、ポールドに事へ後去りて佛王に仕へたり

此メモアールは一四六四年より九八年に至る迄彼の見聞せる事實を記したる者にしてマコーレイは彼を以て博識なる政治家となせり其書英譯收めてボーン文庫にあり題して *The Memoires of Comraies, containing the Histories of Louis XI, Charles VIII, Kings of France, and of Charles the Bold, Duke of Bur gundy* と云へり一見して其如何なる事を記せるやを知るべし

橋本左内(承前)

文

清

外交の難事は公武合體の説を生ト、儲君論を誘起し、天下益紛糾の渦中に陥れり、吾人今左内の此間に於ける位置及運動を叙せんと欲せば、是非當時の概況に就て少く述ぶる所なくんば非かず、當時幕府は決して其威勢を失墜し去りたるにも非らず、又當局の人物を欠きたるにも非かず、閣老阿部正弘の如きは、寛弘にして雅量ある良宰相と云ふべく、又川路岩瀨れ如きも、時流を拔ける好箇の大臣なりき、然れども意外れ邊より突如として落下し來れる外患の前には、彼等は狼狽せざるを得ず、狼狽して廟算立たず、天下は動搖し始めぬ、上下は沸騰し始めぬ、彼等は責任を双肩に負ふて事を決するの勇を鼓する能はず、寧ろ其胸中に餘れる苦悶を取りて天下に分ち、天下と共に其憂を同うせんと欲せり、

事變は朝廷に奏達せられたり、諸侯に諮詢せられたり、然れども我より智識無く時勢に疎き者よりして、何ぞ或良策或慰藉を受取り得る筈のあるべき、否々無理なる注文は諸方より集注しぬ、進まんと欲して進む能はず、退らんと欲して退く能はず、因循姑息の譏を買ふて、幕府は益困阨

の中に逡巡せざる可からざるに至れり、

天に二日無く圓に二の中心を合む可らず、事實上のポリアーキは早晚一主權の下に歸着せざる可からざるは勢の免れざる所なり、況んや一たび別乾坤の門戸を放ちて、外國と交渉するに至りては、かゝる頭尾を分たざる政体は到底其運用を全ふ難きに於てかや、然れども例令幕府は天下の非難を蒙りたるにせよ、強弩の餘勢猶諸侯の腰背を防ぐに足り、人心漸く朝廷に向ひたるにせよ、未だ中興の宏漢を畫し得るに至らず、此過渡時代に於ける繙縫の政策として、變則ある公武合體論は提供せられ、諸侯も有志も幕僚も皆此問題に向つて走れり、即ち彼等は幕政を革新し、公武の一致を計り、兵備を修めて以て對外の大策を樹てんことを説きぬ、而して此等論者の中心は實に當時の大立物たる水戸烈公にして、彼等は先づ一橋慶喜(烈公の子)を以て儲君となし、烈公をして幕政を總裁せしめ、諸侯の賢明を擧げて各要職に當らしめ猶天下の俊才を拔擢せんと欲せり、吾人は今左に左内が手翰の一節を録す、公武論の如何なる者かりしやは蓋し知るに難からざるべし。

(前略) 楮右様大變革相始候に就ては内地之御處置此迄之舊套にては不相濟第一建儲第二我公水老公(烈公)薩公(齊彬)位を國內事務宰相の專權にし肥前公(齊正)を外國事務宰相の專權にし夫に川路永井岩瀨位を指添其外天下有名達識之士を御儒者と申名目にて陪臣處士に不拘選舉致し此も右專權の宰相に派別に致し附置尾張(慶勝)因州(松平相摸守鳥取の城主)を京師の守護に其指添に彦根(井伊)戸田(大垣)城主(位蝦夷へは伊達遠州土州侯(容堂)位相遣し其外小

名有志の向を擧用候は、今之勢にても隨分一芝居出來申候歟と奉存候其上魯西亞墨利加より諸藝術之師役五十人許借受諸國に學術稽古所相起物産之道を手廣に始め内地之乞兒雲介之類に頭を立て相應之賄遣し蝦夷へ遣し山河之管爲致往來は重に海路より致し候は、蝦夷も忽開墾可相成航海術も直可熟奉存候(中略)其中薩の事は御不同意にも可有之候へ共此は小柵大に所見有之事に御座候畢竟日本國中を一家と見候上は小嫌猜疑には不可拘は勿しに御座候昨日も川路之咄聞候處此も右迄の見は不承共何分日本に於て遠大之處置無之しては不相濟就ては魯に和親と結び且健儲を致し根本を固め候腹は有之塩梅に御座候乍去全く風波を恐居候由其内實に難澁ある咄共有之不計感慨落涙仕候何分此後何等之邊へ落付可申哉頓と不被計實に志士可憤腕之秋に御座候(下略)

此の如き政体は果して建設すると得たりしか、事實は則之に反せり、然れども例令一時の建設を見たりとするも果して能く朝幕間を調和を保ち、對外の方策を確定し得たりしかは、吾人の想像の否定する所あり、何となれば此等の論者は或は攘夷を主張するあり或は開國を唱導するあり、既に公武論を生じたる根本の外交問題に對して各其意見を異にするべなり、されど只其議論の正大にして公平無私なると、時勢に好合せしとは、天下の同情を得し所以にして、越侯の如きは殊に其宗家に對し、朝廷に對する義信よりして、自ら此論の主動者たりし者、豈又偶然かふんや。然れども頓挫は相尋で來りぬ、安政二年十月戸田藤田の豪傑江戸に震死して、此論の中心たる烈公の勢力又昔日の觀あく、安政四年六月齊彬が結托せる阿部正弘卒して、合体派は殆んど幕閣との連絡を失へり、只餘す所の一策は儲君問題あるのみ、彼等は即此問題に成功して以て其大主義の遂行を計らざる可はず、

儲君論勃興の動機を與へたるは外患にあり、當時將軍家定多病にして懦弱、到底時難の衝に磨るに堪へざると其嗣子なきとは夙に有志の憂へし所、之に反し彼等は烈公の愛子、一橋慶喜が賢明の稱あるを聞き、齊しく望を彼に繋ぎ、彼にして儲貳の位地に立たば、所謂公武合体其實を擧げて能く外患を極ふに足ると信せしあり、越侯慶永も亦熱心なる此説の主張者にして、薩水土肥の諸侯と共に力を合せ、或は建白を以て、或は面諭に依て、幕閣の間に説けること屢なりき、然れども幕閣多難を以て延遷未だ事を決せず、安政四年五月侯封國より江戸に抵れる頃に於ては、將軍病んで益衰へ、外患愈急あるを以て候等憂慮措く所を知らず、即齊彬と謀り西郷隆盛を京師に遣はして、近衛三條の間に遊説せしめ、七月急に左内を江戸に召して、樞機に參與せしめ、東西呼應して儲君論の進捗を計れり、

智謀を揮ふの時到来り、辨力と試むるの機來れり、左内今や一藩の先生に非ざらずして天下の謀士とありぬ、彼主公の意見を聞くや、幕政の姑息を慨し、時事の非あるを嘆き、知遇の辱さに感し、主公の苦衷に泣きぬ、誓つて曰く幕府營中の事、公願くは親ら勞を取り給へよ、諸藩の有志を遊説し、草莽の志士を糾合するに至りては、臣謹んで之に當ふんと、彼は既に躬を鞠くして國難に殉じ、以て此例なき殊遇に報ひんと期せしかり、

彼れ則ち滿腔の熱誠を瀝ぎ、得意の雄辨を揮ひ、外列藩の志士に交り、幕府は有司を説き、内越

侯を助けて畫策する所ありき、曾て公命を以て幕府の司農川路聖謨に説く、川路老俠質實にして、容易に人を信せず、人皆敬憚して犯す者あるなし、左内説入一回遂に之を服せ、後川路人に語つて曰く、越藩の士橋本左内尙弱齡、來て僕に説く其議論剴切精到、一々肯綮に中り、僕が半身已に宰割せらるゝの感ありき、僕年來客を見ること無數、未だ此の如き可畏の人に逢はずと、彼は實に山東の豪傑を屈する蘇張の辨才を抱きしなり、彼又深く隆盛と交る、二人會見の逸事は、各其本色を現はして興趣あるを覺ゆ、一日左内西郷吉之助を薩邸に訪ふ、海江田俊齊も亦同く座に在り、西郷彼の狀貌を見て之を輕侮するの風あり、左内曰く余之を寡君に聞く、足下風に國事に盡々と誠に敬服に堪へず、久しく芳名を欽仰して今日幸に相見るを得たり、願くは高教を仰がんと、隆盛曰く、甚哉足下の余を誤れること余痴愚國家の事を知らず、唯此俊齊等と旦夕角力を事とするのみ、復他事に及ぶ違ふ、看よ力士等の出入斯の如きをと、(此時恰も力士等邸内に在り) 語氣頗る冷然たり、左内曰く足下深く藏匿すると勿れ、余既に足下の志を知る、請ふ胸襟を開きて教示する所あれど、自ら進んで時事を説く言々肯綮に中り、慷慨忠憤の情自ら人を襲ふものあり、左内更に幕儲の事を言ふ、此時西郷及俊齊等固より一橋公の入りて幕儲たる可きを信ぜしが、始めて大老慶福(紀伊)に意あるの密事を聞き、頗る耳識を驚動せり、是に於て隆盛私に左内の卓識侮る可らざるを知り、曰く余始めて足下に依て幕情を審み得たり、明月更に足下を訪ふて深く議す可き者ありんと、左内亦欣然として去れり、後ら西郷俊齊を顧みて曰く今日の談論余甚だ敗せり、余始め彼の言語容貌宛り市朝に似たるを以て、以爲らく這般の小弱兒、明

りに國家を喋々す、過分も亦甚し、安んず時勢を論ずるに足らんやと、何ぞ料らん彼れ報國の精神に富み、天下の事情に明りに、且頗る才學智識あり、復當代の奇男兒あるとは、我無禮殆んと同志を失はんとせりと、翌朝即左内を靈巖島の越邸に叩き、共に俱に相提携して、天下の爲に奔走せんことを誓ひしと云ふ、

一方は眞率なり、一方は磊落なり、此は謙虛彼は傲岸、此は温粹彼は高朗、此は才識に富み彼は氣魄を以て人を服せ、堂々たる豪骨の偉丈夫と、珊珊たる瘦軀の俠書生と、双々相對し來れば、兩雄の面目の活躍するを見るあり、後隆盛復人に語りて曰く、余先輩に於ては東湖氏に服し、同濟に於ては橋本左内を推す、二子の才學器識豈吾輩の企及する所あらんやと、然り隆盛が自白せる如く、人物と云へる點に於ては兎も角も、彼が學才は決して隆盛の及ぶ所に非らざりしある可し、

兩雄既に手を握る、彼等は同く公武合体の論者あり、一橋擁立の論者なり、隆盛は齊彬を代表して運動し、左内は慶永を代表して奔走せり、彼等の計畫は如何かりしか、左内が同國人某に與へたる書は能く當時の事情を説明して曰く、

(前略) 諸西城御一件爾後何も相變候儀も無御坐候へども先以惡風は頓んと吹不申御安心可被下候去八日西郷吉衛來話種々薩公よりの御傳言申述何分彼一條は萬端太守様(慶永)御指圖を蒙り力所及は周旋可致旨被仰付候由に付其翌直に態々吉衛を小拙御小屋呼寄御着料金三百匹被下且御掛合迄頂戴被仰付依之御臺様(家定の夫人)御手許への周旋は箇様く堀田(閑老)

へは箇様に致吳候様篤と小拙より申諭候處當人命にも換心配仕候旨御請申罷歸申候十四日上田(松平忠固)へ御逢對御座候處此も先相變候話も無御座何分精々は心配も可致旨乍去當年は如何にも墨吏一條にて騒々敷輕易の事ならべ隨分片手業も利候へ共兩方共無比の大事故迎も當年は六箇敷云々被申候由又愈獨木君(一橋)に可限候哉如何と申詰被遊候處此は御同意に候乍去御一人指詰伺も難致候何れ伺の節は田(田安中納言)橋(一橋慶喜)紀(慶福即後家定)と三つ并に可申出心得也併拙者共見込は橋の方と被申候由右付大急西郷呼寄水土(水野土佐守)の奸謀并閣老受方獨木に知宣上候乍去伺之節は三名可相成旨少々相洩借秘策を授け薩の御簾中様(齊彬の夫人)より御直に御臺様へ云々御申上に相成候様申聞候處直に承知仕候(中略)此上は何卒閣老にての御盡力專利と申事書取に致し内々堀田侯(其前に一應西城の事追信迄に演舌致度旨靜海を以爲申込候也)戸塚靜海を以て勸勵に相成候處隨分受方宜く態々御家來御指出に相成誠に御厚意乍去當今は外夷應接に付此事一寸難振込候此際相濟候へば忽ち尽力可申上候と靜海へ被申語候由云々(下略)

是に依りて之を觀れば、越侯等は御臺所(島津)一族の女あるを齊彬養ふて子とし更に近衛忠熙の養女として幕府に入興せしなり)が齊彬夫人の養女あるを利して、密に之に依りて世子決定の策を授くると共に、靜海(幕府の蘭醫)等をして幕閣に説のしめ、一方には内廷より、他方にては外府よりして密に計策を施せしを知るに足る可し、然れども彼等は遂に其目的を達すること能はざるに至りしなり、

何ぞや、大奥に於ける反對運動是なり、由來大奥は幕政の因て決せざる所、天下の輿論を以てするも如何ともする能はず、臺閣の抗議を以てするも奈何ともなし難し、彼等は年長を好まず、賢明を喜ばず、一橋派の聲勢盛なるを見て、彼等は茲に水戸反對の黨井伊直弼を引いて外援とあり、以て少弱ある紀伊侯擁立の計を爲せり、嗚呼公武論者が外交上より國政上より熱心に説き出せる儲君論は、今や政見の異なるが爲に争はるゝに非ざらず、又對外の主義の反するが爲に争はるゝに非ざらずして、只威福を逞ふし權柄を弄せんとせる一派の私争の目的たらんとす、

此時に當り堀田備中守正睦阿部の後を襲きて閣老の班に在り、彼れは一箇は外交家にして開國の主義を懷き、岩瀬忠震等と共に外交の局に膺り、安政四年十月衆論を排して米國領事「ハルリス」を將軍に謁せしめ、同十二月斷然意を決して開國貿易を許し條約を規定せり、是則將に廢棄せられんとせる今日の條約なり、然れども彼は諸侯は異議志士の憤慨を恐れ、勅許を得て之を鎮めんと欲し、十二月津田正路、林大學頭を京師に遣はし以て朝廷に説かしめたり、されど彼等は攘夷論の巢窟たる京師に於て何事を爲し得んや、要領を得ずして空しく歸東しぬ、是に於て堀田は川路岩瀬を従へて自ら京師に上り、愈外交の大策を決せんと期せり、而して建儲の一事は附帶して兩派の運動を高めぬ

安政五年正月堀田等京師に着す、京師は今や政治上の中心とされり、開國家叫び攘夷家呼び、一橋派走り紀伊黨走る、合従を説くの張儀連横を論ずるの蘇秦、彼等は東西に奔馳して以て廟謨を動さんとせり、隆盛先づ入京し、左内亦上京の主命を受けぬ、人生感意氣功名何足論、彼は名を桃

井伊織と變ト安政五年正月廿七日劔を杖いて江都を去れり、

(義) 雪の肌に氷の又露の命の捨所

小松帶刀

雜誌錄

哺乳動物の壽命測定法

市村塘

予嘗て本誌に於て生物の壽命と題し聊か論述したるとあり、然るに就中哺乳動物の壽命に關し近頃アインスリーホーリス、ベル兩氏の着眼論旨頗る趣味あるを覺ゆれば、序に又候紹介し置くべし。

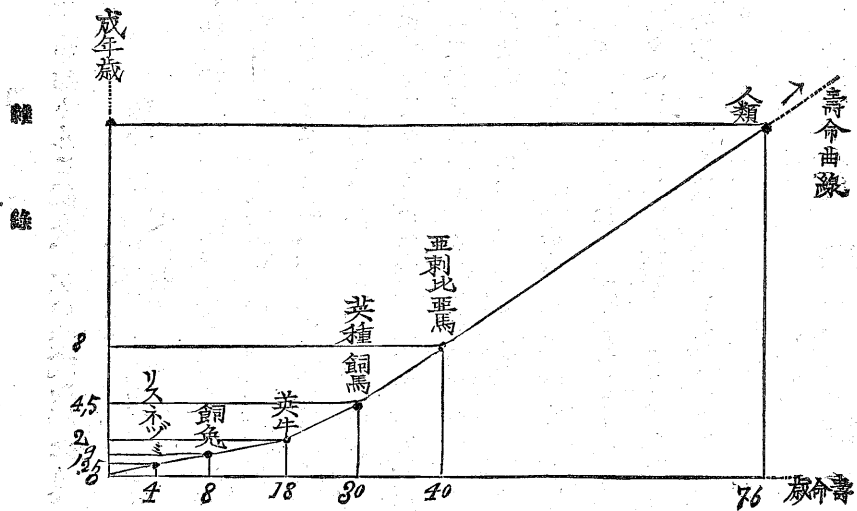
先づアインスリーホーリス氏は哺乳動物の同一種より數變體を生ずる原因研究中、計らずも其成年期と壽命期間に一定法則の存せざらむやといふ疑念を起し、調査の結果終に斯く論斷したり、概して短命なる哺乳動物に於て其成年齡と壽命齡との比は概して長命者の同比より小なりと即ち次式の如し

(短命ノ哺乳動物) 成年齡

(長命ノ哺乳動物) 成年齡

同上壽命

同上壽命



假令へばリスチヅミの成年齡は生後三ヶ月程なるに其壽命は四歳なり、則ちリスネヅミは其成年期の十五倍尙成年後に生存し得るものといふべし又亞刺比亞馬の成年齡は略ば八歳なれども其壽命は四十歳あり、換言すれば馬は唯成年齡の四倍尙成年後に生存し得るものなり、然るに吾人人類にありて成年期といふべきは鎖骨の胞骨培生突起が完全骨体に癒合する時にして略ば廿五歳ありとす、されば吾人の壽命(七十六歳とすれば)僅のに成年期の二倍強の過ぎざるものといふべきあり、氏は最も普通見るころの哺乳動物を撰擇し、其成年齡と壽命齡を比較し其所謂壽命曲線なるものを案出したり、圖に示すもの即ち是なり、竟畢夫の法式を表形的に見易く指示せるものといふべし、

長さを知らんと試み、次の法式を得たり。

$$\text{壽命} = \frac{10.5(\text{成年齡})}{\sqrt{\text{成年齡}}} \quad \text{或は} \quad 10.5 \times (\text{成年齡})^{\frac{2}{3}}$$

されば哺乳動物の生活し得る長さ即ち壽命なるものは、其各成年齡を十半倍し、之を其立方根にて除したる商を意味するあり、故に敵刃、禍災、疾病、飢餓、過勞、神瘴、衰弱等の不慮致死などは此限りにあらず、而して体形の略ぼ備はりたる時期は別に之を青年と稱し人類にては大抵十五歳位なれども、最早成年といへば培生突起が骨着する時期にて廿五歳位とす、然るに獅子及び虎にありては三歳にて青年、六歳にて既に成年とあるあり、換言すれば獅子虎の成年齡は其青年齡の二倍されども、人類にありては一半倍なりといふべし。

下表は飼養者の口碑、及び學者の觀察により得たる報告より編集したる壽命年齡と、同氏の法式より得たる壽命年齡を比較し、以て其略ぼ實際的觀察と法式計算の結果物一致せるを示せるものに係る、故に今茲に一動物(少くとも哺乳類)ありて、其壽命幾何あるやを知らんと欲せば、其成年齡さへ分り居れば算出得るとなれるあり、表中觀察者の異なるにつれ同一種の成年齡に相違を生ずる如きは、亦止むを得ざる次第といふべし、斯る場合には無論平均數を撰ぶを宜とす。

動物名 記者 觀察 成年齡 壽命 壽命年齡

法式より得たる壽命年齡

| 動物名 | 記者 | 觀察 | 成年齡 | 壽命 | 壽命年齡 |
|-----|-------------|----|------|---------|----------|
| リス | アインスリーホークス氏 | 三 | 二五〇 | 五、一四、 | 四、一六七〇 |
| 南 | フロートレンス氏 | 七 | 五八三 | 六、一七、 | 七、三三〇〇 |
| 飼 | エドワーズ氏 | 九 | 七五〇 | 八、 | 八、六七〇〇 |
| 飼 | ミバート氏 | 八 | 六六七 | 八、 | 八、〇一二三 |
| 猫 | ゼーニング氏 | 一 | 一〇〇〇 | 二、 | 一〇、五〇〇〇 |
| 山 | ペグラー氏 | 二 | 二〇〇〇 | 一五、 | 一六、六七〇〇 |
| 狐 | ミバート氏 | 一 | 一五〇〇 | 一三、一四 | 一二、一八〇〇 |
| 牛 | アインスリーホークス氏 | 一 | 二〇〇〇 | 一八、 | 一三、七六〇〇 |
| 犬 | ダーウキン氏 | 二 | 二〇〇〇 | 一八、 | 一六、六七〇〇 |
| 英 | アインスリーホークス氏 | 二 | 二〇〇〇 | 一五、一二〇、 | 一六、六七〇〇 |
| 英 | アインスリーホークス氏 | 四 | 五〇〇 | 三〇、 | 二八、六二〇〇 |
| 家 | ゼームスロング氏 | 五 | 〇〇〇 | 三〇、 | 三〇、七〇〇〇 |
| 河 | チアンパー氏 | 五 | 〇〇〇 | 三〇、 | 三〇、七〇〇〇 |
| 獅 | ミバート氏 | 六 | 〇〇〇 | 三〇、 | 三〇、七〇〇〇 |
| 英 | ブレイト氏 | 六 | 〇〇〇 | 三〇、一四〇、 | 三四、六七〇〇 |
| 亞 | ブレイト氏 | 六 | 二五〇 | 三五、 | 三五、六三〇〇 |
| 亞 | アリンズリーホークス氏 | 八 | 〇〇〇 | 四〇、 | 四二、〇〇〇〇 |
| 亞 | アリンズリーホークス氏 | 八 | 〇〇〇 | 四〇、 | 四二、〇〇〇〇 |
| 人 | フロレンス氏 | 八 | 〇〇〇 | 四〇、 | 四二、〇〇〇〇 |
| 人 | ブフホン氏 | 二五 | 〇〇〇 | 九〇、一〇〇、 | 八九、七七〇〇 |
| 象 | ダートウキン氏 | 三〇 | 〇〇〇 | 一〇〇、 | 一〇一、四〇〇〇 |
| 象 | ホルター氏(印度獵人) | 三五 | 〇〇〇 | 一二〇、 | 一一二、三五〇〇 |



就中ブレイン氏の馬に於ける觀察の如きは載せて「田舎遊戯學術字林」にあり、氏自らも随分緻密の調査を遂げたりといへり、曰く五歳の馬は二十歳の人に比すべく十歳の馬は四十歳の人に、三十五歳の馬は九十歳の人に比すべしと、即ち二者各十歳以上にありては馬の一歳を以て人の四歳に匹敵せしめ得べく、人の成年齡を二十五歳とせば、馬の成年齡は正に六歳四分の一に相當せしむべし、而して人の九十歳に比すべき馬の三十五歳は全く法式より算出したるものと同値なるは奇といふべし、又ダーウキン氏の象に於ける觀察は「種源論」中動物増殖を論ずる項に詳なり。

之を要するに凡そ生活期長き動物にありては其成年に達する迄に長時日を費し、成年後の時日却て比較的短縮せしむるも、反之して生活期短きものにありては早く成年に達する代はりに、成年後の時日比較的延長せりといふべし、而して此諸動物成年期を確實に調査せるは誠に容易の業にあらざるや明なり、現にオット氏は廿七歳の人に於て尙未だ培生突起の骨着せざるを見たる事ありといふが如く同種類の動物にても同一徹に行りぬと多し、其成年期に早晚あるは到底免るる能はずと雖も、兎に角今日一動物の成年齡概數を知らば此動物は果して無事に幾ヶ年間生活し得るものあるや即ち其壽命幾何なるやを略ぼ算出豫想し得るに至りたるは亦一進歩と謂はざるべからず、敢て報ずと爾云。(了)

俚 諺 雜 話

紫

影

諺は一種の教訓を單簡に言ひ顯せるものにて、時の古今國の東西を問はず、國民あればそれが諺あり、かくて國毎に特殊の諺語を生ずると共に、交通の便を借りて、甲の國より乙の國にゆき、乙より甲に入り、互に交換傳播して己まず、而して其國性に合するものは、外國の産と雖も、よく其風土に化して、永く其地に留まり、遂には入歸化人たるを忘るるに至る、されば俚諺の意義は説明を待たずして、萬人共に首肯し了解するより、學者も文士も演說家も、皆之を利用して、自己の所説を最も明瞭に、最も簡短に、最多數の人に傳へんとせり、始めて諺を収集したるは、希臘のアリストートルあり、其後有名の詩家文人皆之に重きをおき、チョーサーの如き、セークスピアの如き、テベレイス、モンテインの如き、皆其著作中に盛に之を引用融化せしを以て、英佛の俚諺に通ぜざれば、其文章趣味を十分に會得する能はずといふ、基督の如きも亦經典中に、許多の諺を用ひたり、されど彼は他れ諺を用ゐるよりも、寧自ら諺を作りたる人なるべし、論語中の警句が、今日我俗間に諺の如くに記憶せらるるも此理なり、東洋にては、古來鄙語といひ、俗諺といひ、俚諺といひ、鄙諺といひ、下世話といひ、上流れ士君子は諺を口にすることを恥づる風あり、是民權の發達せざりし餘響にして、今日尙且動もすれバ侍屈の漢語、不通の熟語に、文を飾り言を嚴かにせんことを癖あり、而して其謂ふ所の議論文章は、淺薄粗笨にして、所謂下世話の一翳に値せず、西洋の諺に「拉典語がわかる程は馬鹿でない」といひ、我川柳氏の「先生と

いはれる程に馬鹿でなく」といへるは、正に此等の先生を指せるからん、されば貴族的開化の盛なりし王朝の文學に、諺を見出すことは甚困難にして、源氏物語、枕草紙の如きは、殆ど絶無といふも可あるべく、民間の俗談巷説を記載せる宇治拾遺物語の如きすら、其作者の殿上人あるうらにや、僅に五六種と存するれのみ、諺の文學と相親近するに至りたるは、足利の末より徳川の初世にして、俗文學の泰斗巢林子の如きは、最も多く最も巧に之を驅使せり、されば英佛の諺に通せずして、其文學の眞味を解し難きが如く、我俗文學の研究者は決して古諺を等閑視するを得ず、我國にて之が収集に従事したるは、松江重頼の毛吹草（寛永十五年序正保二年刊）を嚆矢とす、總數七百有餘種、之につぎて、松井壺峯の野語述説、青木鷺水の故事要言、節遊燕の漢語大和故事、貝原好古の諺草、井澤長秀の本朝俚諺等あり、体裁は後の數者稍整ひたれども、古諺を網羅せる數に於ては、皆毛吹草に及ばず、

諺語集によりて、各國の諺を觀察するに、其多數は國民特殊の思想感情を顯し、或時代の理想風俗習慣等を示し、節儉忍耐徳を教へ、處世の要訣を説き、或は深遠なる哲學の寸錦あり、幽玄ある宗教の片玉あり、孰も一面の眞理を寓せざるはなし、俚諺の攻究、豈迂拙無用の閑事業からんや、

抑も諺とは何ぞや、言挙げせぬ大倭の國人は、只たこへとか言草とか、語をのへていへる外、之が定義を試みたるを聞かず、支那人は諺は俗論也直語也とぞ、例の一口に言ひ放ちて、漠然雲を攫ひが如し、夙に學問の精緻を以て誇る西人にも、未だ確然たる定義なく、「人の常に口にする

短文句」との「長き經驗より來る短き教訓」とういひて、是亦文學的にして、學術的定義にあらず、ホーエルは簡短、意義、譏刺（譯語適切ならず暫く之に従ふ）を以て諺の三要素とせり、其意に曰く、諺は簡短からざるべからず、一呼吸に言ひをへらるゝべかりに、緊縮せしむるを要す、一箇の意義と含蓄せざるべからず、日常談話中の零碎ある語句の如く、無意味からざるを要す、長く人の記憶に存すべき爲に、一種の刺戟性を有するを要す、此語前數者に比して、稍精細かれども、猶未だ十分かりといふを得ず、形体短小にして、意義あり、刺戟性あるもの、必ずしも諺ならず、碑銘絶句俳句の如き、亦此三要素を具備す、然れども誰り直に之を以て、悉く諺なりといはん、簡短は機警の要素あり、之によりて意義を一層強くすることあるは、疑ふべからざる事實あり、寸鐵人を殺し、長鞭馬腹に及ばざるは、吾人の熟知する所、英語の *Extremes meet*、*Forewarned, forearmed*、獨逸の *Voll toll* の如き我國の壁に耳、金が敵、盲蛇、藪蛇、親馬鹿、職敵、鷺を鳥、犬と猿とれ如き、皆最も其形体短少にして、其意義の却て明確なるものなり、されど世界各國の俗諺中には間々頗る長大なるものあり、長ければとて諺は諺なり、長さが故に諺にあらずといふべからず、獨逸にて最も長き諺は、四十七語より成れり、

Man spricht, an viererlei Leuten ist Mangel auf Erden: an Pfaffen, sonst dürfte einer mit 6 bis 7 Freunden; an Adelichen, sonst wollte nit jeder Bauer ein Junker sein; an Huren, sonst würden die Harnwerk Eheweiber und Nunnen nit trieben; an Juden, sonst würden Christen nit wuchern.

我國にて長きものは

落ちさうで落ちぬ者は二十坊主と牛の罌丸落ちさうもなく落ちて落ちるものは五十坊主に鹿の角
 武士の子は鏝の音に目をさまし商人の子は十露盤の音に目をさまし乞食の子は茶碗の音に目をさ
 ます

九重の塔高しと申せども燕が飛べは下にあり劔は刃はやきとて岩の角をは削らぬもの竹の林高さ
 とて忒利天へは昇らぬもの

此等豈ホーエルのいはゆる一氣に口誦し得べきものならんや
 俚諺論の著者トレンチ氏は、如上の三要素に加ふるに、更に一の普通ポピュラー通を以てし、其必要を説い
 て曰く、如何に名言警句を吐きたりとして、何人も之を傳唱する者なき時は、廣く世間に流布して、
 諺とある能はず、故に普通も亦諺の一要素なりと、(未完)

日本文法に關する重かる書籍

武 笠 三

今より凡そ二百年の昔、浪華に僧契沖ありて、古書に考據して邦語の新研究をはじめしより、本
 邦こゝに文典語法の學あり。既にして谷川、富士谷の諸家相前後して起り、本居氏父子に至り
 てその學頗る精微に入れり。爾來、之を補ふもの、之を駁するもの、紛然雜然として起り、隨
 て斯學に關する著書亦頗る多く、中にも若狭妙玄寺に義門法師の如きは、最も熱心なる研究者
 にして、その精博、本居以後の第一人と稱せらる。然れども畢竟、本居以前の諸家は本居を起
 すものにして、本居以後の諸家は本居を補ふ者なりといふべきに似たり。

明治の今日に至り、諸家の研究は益々その歩を進め、斯學の漸次精微の域に入るは甚喜ぶべき
 事なれども、その間なほ多大の遺憾あり。起て斯學の完成を期せむとは、實にわが新進篤學の
 士に細心なる研究に俟つあるなり。

予固陋寡聞、文法の書に於て讀む所甚多からず、然れども或は原書により、或は曾て繙閱の際
 に抄記せしものにより、或は先輩の筆録に據り、おゝに契沖以來の、斯學に關する書目の
 一二を記す。さればその書の重かるもの豈こゝに盡きたりと謂はむや。只一とけなく書き集め
 たるもの目錄が、若し斯學研究の一助とあるふしもあらば、そは眞に何よりの幸あるべし。

近時「チャムバレン」「アストン」「サトウ」「エドキンス」諸家、外人にして斯學上價值ある述作
 を出せるもの、亦や、十指を屈するに足るべし。こは他日別に紹介すべし。

和字正濫抄(契沖) 五卷

古書に準據して假名遣の誤りを正とを主としたれども、活語居体言の法をも示し、卷首の言語
 音韻に關する總論亦必讀むべきもの也。元祿癸酉の自序あり。癸酉は六年あり。刊行も同年な
 るべし。

和字正濫抄要略(契沖) 三卷

正濫抄出で、後、橋成員といふ人、契沖の説を非なりとして、元祿九年、和字通例書八卷を著
 はしければ、契沖また此の書を著して前説を補張證明せり。元祿十一年著。

和歌八重垣(有賀長伯) 七卷

歌學の書あれども、てにをはの用法、係結等の事にも説き及ぼせり。本居氏の詞の玉の緒、紐鏡等はよの書に基けるものならむといふ。元祿年間の作。寛政三年刊行。(再刊なるべし)

持明院假名遣(持明院基輔) 一卷

假名遣の書あれども活用の事にも説き及ぼせり。寶永三年の奥書あり。

和歌童翫抄(武陽隱士遁危子) 一卷

持明院假名遣、和歌八重垣の説をかし擴めて、その規則を歌につくり、記憶し易うらむ。年代詳からぬと、「有賀長伯の後、富士谷成章の前の書なるべし」と落合直澄氏の説也。遁危子は、一説に亨辨上人といふ法華僧なりといへり。

日本書紀通證(谷川士清) 三十五卷

日本書紀の註釋あれども、卷首に和語通音の説あり。五十音の全体にわたりに活用を説き明したるは是をばとめとす。おほは本書は書紀の註釋としても最も成功したるもの、一也。延享四年脱稿、寶曆十二年刊行。

倭訓栞(谷川士清) 六十八卷

辭書なれども卷首に、大綱一卷あり。活用、轉訛、音韻等、すべて邦語の全体にわたりに、その説甚有益なるもの多し。文政十三年及文久二年刊行。

うざし抄(富士谷成章) 三卷

あゆひ抄(同) 六卷

富士谷氏の文法は、すべての詞を、うざし、あゆひ、よそひの三種に區別す。かざし抄はその所謂挿頭(副詞、名詞、感歎詞等)につきて説き、あゆひ抄は脚結(助動詞、てにをは)等につきて説く。本居以前にありて、斯學上最卓見あり、價値ある著書にして、春庭氏の詞の八衢は實に之を大成したるものならむといふ。うざし抄には明和四年、あゆひ抄には安永二年の端書あり。よれ刊行の年月なるべし。よそひ(動詞、形容詞等)につきて説けるよそひ抄も寫本にて傳はれりといへど得見ず。

語意考(岡部眞淵) 一卷

延約音、略音、通音等の説見るべし。但五十音の五段に、初、体、用、令、助の五つを配當して、活語は悉く五段に活くものと定めたるは謬見也。蓋し文法の學は斯翁の長所に非る也。明和六年著、寛政元年刊行。

てにをは網引綱(梅井一室) 二卷

武者小路、烏丸等堂上家の説によりて、専ら助辭を説明し、てにをはの名目は、ヲト點に出るよしをも説けり。明和七年刊行。又同じ人の著述に、蛛のすがき二卷あり。網引綱の脱漏を補ひたるもの也。安永九年の自序あり。

石上私淑言(本居宣長) 二卷

歌學の書なれども、体言用言等活語につきての説もあり。寶曆十三年著。文化十三年刊行。詞の玉の緒(本居宣長) 七卷

専ら係結、てにをはの上につきてその用例を示し、變化轉用のあとをたゞし、その説、最詳細明確也。安永八年刊行。この書につきて後人の説をあすもの甚多し。今その二三を擧ぐ。

○玉の緒線分(義門) 五卷 天保六年刊行。

○詞の玉の緒補遺(中島廣足) 附録共六卷 一名手引草。萬延元年刊行。

○玉の緒末の分櫛(長野義言) 三卷 弘化二年刊行。

○詞の玉の緒延約(幻裡菴) 七卷 玉の緒の繁きを支り足らざるを補ひたるもの。

○詞の玉の緒頭注(權田直助)

○玉の緒變格辯(黒川真頼、三田葆光) 一卷 玉の緒のうちに變格とせられたる係結の變格に非ざる旨を辯ず。明治十六年刊行。

てにをは紐鏡(本居宣長) 一卷

用言の活用、てにをはの用法等を圖解したるものにて、玉の緒の目錄の如し。故に、彼此相照して見るべきより、宣長自ら記せり。明和八年刊行。参照すべきは、

○てにをは友鏡(義門) 一卷 天保十二年刊行。

玉あられ(本居宣長) 一卷

歌の部、文れ部の二門に分ち、専ら應用の上につきて、誤用し易き言語、語格を擧げたり。寛政四年刊行。之を敷衍したるものに、

○玉霰窓の小篠(中島廣足) 五卷 あり又之を辨難したるものに、

○玉あられ論(實田村のくすし加藤千蔭の歴名なりといふ) 一卷 あり。それを反駁したるものに、

○辯玉あられ論(三井高蔭) 一卷 あり。

御國詞活用鏡(本居宣長) 一卷

古書のうちよりあらゆる活語を集めて、二十七會に分類せり。天明二年著。十餘年前、小田清雄氏の書入本刊行せられたり。

詞の八衢(本居春庭) 二卷

用言の活用を、四段、一段、中二段、下二段、變格、ししましくの活、しましくの活と定め、例を古書に採りて之を證明せり。父宣長の玉の緒と共に語學上の大著述と稱せらる。文化三年刊行。この書につきて亦後人の述作あり。

○詞れ八衢補遺(中島廣足) 二卷 一名蔭踏む道。嘉永六年著、安政四年刊行。

○詞の八衢捷徑(富樫廣蔭)

○詞の八千くさ(珠阿彌) 三卷 八衢の摘要也。

○詞れ八衢附考(黒川春村) 二卷 一名活語四等辨。

詞の通路(本居春庭) 三卷

用言の轉用、自他れ區別等を論證す。文政十一年刊行。

○通路街之榮(長野義言)

○詞の通路頭注(權田直助)

山口棗(義門) 三卷

活語雜話(義門) 三卷

二部共に活語につきての隨筆あり。零碎なる考證多けれども、その論證最も詳明的確あり。棗は刊年未詳、雜話は天保十、十一年刊行。

活語指南(義門) 二卷

活語の法を將然言、連用言、截斷言、連体言、已然言、希求言の六とし、一々例を擧げて説明せり。弘化元年刊行。

語學新書(鶴峯戊申) 二卷

和蘭の文典を邦語に應用して、實體、虛体、代名等の九品、所奪、所生等の九格を定めたり。これ實に西洋流文法の起源あるべし。天保四年刊行。

助辭本義一覽(橘守部) 二卷

音に義理ある事を説く所謂一音義説の方面より助辭の義理用法を論ず。天保六年著。同九年刊行。

以下書名并に著者のみを掲ぐ。

詞の玉橋(富樫廣蔭)

てにをは玉襍 同添紐(同上)

活語初之棗(長野義言)

言辭ゴトバの音コエの貌サマ(井面守訓)

てにをは係辭辨萩原廣道

言語四種論(鈴木服)

活語斷續譜(同上)

詞格一覽及對照(黒川春村)

詞の捷徑(鈴木重胤)

轉語考(中島廣足)

助辭音義(富樫廣蔭)

言靈のゝるべ(黒澤翁滿)

辭格考(物集高世)

語學指南(佐藤誠實)

助辭音義考(堀秀成)

假字本義考(同上)

ひかげかつら(同上)

語學階梯(同上)

言靈妙用論(同上)

詞の經緯圖(權田直助)

語學自在(同上)

語彙別記(木村正辭、横山由清等)

語彙活語指掌(同上)

活語自他捷覽(横山由清)

雅言音聲考(鈴木順)

五十音圖說(富樫廣蔭)

五十音小説(橘守部)

五十音義訣(平田篤胤)

五十音圖考證(本間眠雲)

五十音考(細井貞雄)

五十音辨誤(村田春海)

五十音口訣(海野幸典)

天言活用圖(同上)

玉の繼(中村尙輔)

詞のくみ(谷千生)

詞の緒環(林國雄)

詞の本末(元木阿彌)

ふりわけ髪(小澤蘆菴)

詞の直路(山田直温)

言靈或問(中村孝道)

活語新論(井上淑彦)

てにをは(玉櫻、林國雄)

さよしぐれ(萩原廣道)

音本義(本間眠雲)

日本語格全圖(堀秀成)

音圖略說(同上)

語學問答(同上)

日本文典(中根淑)

日本小文典(同上)

用言變格例(鹿持雅澄)

結詞例(同上)

鍼囊(同上)

言靈徳用(同上)

文典辨疑(權田直助)

体用辭圖解(同上)

詞の眞澄鏡(同上)

形狀言八衢(同上)

てにをは品定め(同上)

体言分類(同上)

助字分類(同上)

用言分類(同上)

詞の近路(佐々木春夫)

活語全圖(佐々木弘綱)

口辭格考(物集高世)

文典初學(黒川眞頼)

この他近頃のは多くして記すに堪へず。その中予が見たるものにては、

廣日本文典大槻文彦 の精嚴なる

新撰國文典和田萬吉 れ簡明なる

日本文典大綱(岡倉由三郎) の斬新なる

などを以て白眉とすべし。

松風煙雨

衍 徨 生

柳條にこぼれし九春の光景も、憐むべし雨に妬まれ風に碎け、空く落花流水の情を止めて逝き、殘紅零紫の嘆、糸雨煙の如く椽鬚瑟琴を敲するにも似たり。惟ふに、龍をだに得ざるに、望蜀の念やみ難き身は、將に累々たる範冊の中に埋まりて、閑に亂帙を檢して讀書曉に徹するの日は近く、正に文債の積れるに泣くんとす呵々

某の日二三の友と、同トき友の横死に、索ねてもよき死因など、是非と浮説を取交はしたる、要かき思の名殘なるにか、己に友の去りし後も、晝の炊事に疲かれし身も、愁に厭世の樂天のこと、心の移り行くまゝに、よしちし事と知りつゝも、左右はあてこもかく書き散らせし果は、伏戸に入りしも眠られぬまゝ、そこ獨り草廬をぬけ出でつ、行くとはあしに畦道ばかり、北へくくこ辿り行けば、何時し身の身は犀漕のほとりに出でぬ。時は水無月近き夏の夜の亥中過ぎ、下弦れ月は青白き光を梢より幹の半々に浴せかけつ、余波を下草の露に流して哀を鳴けよと虫の聲を促す、彼蒼天拭ふに似て星しげく、風をよくと梟松桂の枝に啼いて哀を送り來る。端なく思ひ出し龍雄の吟、撲面黃塵豈浼予。人間到所在情慮。と將に之れ無言の感嘆は凝て魂は宇宙に飛び、律呂此に高く詩篇此にあるれ時。……………昨日見し人、今日は亡き世を夢と見おし、果敢なくも猶まじろまず、羝羊の嗜味元より耳うとくて、無明の眼亦覺しともせず、茫乎としておにがなしに不平の果は、更に何を悟らんよしもなく、憐れ經るとはなしに春を送り、夏を迎へて日を經し白痴が、定まれる性かき人安ぞ悪うらむ、縁に遇へば則ち庸愚も大道を庶幾し、教に順する時は

凡夫も聖賢に齊しうらむことを思ふと、高野の大師が宣ひしとか、思へ汝往事は皆非なりとも、省よ汝往時は皆仇なりとも、今はた汝何とか寛めむや。心を恣にせば輕裘も衣るに足らト、足るに任ずれば一簞の食何かあらむに、ありし往時を憶ひ出で、盡せね緒環くり返すも、憐れ招く尾花の夫らぬか、多くは皆異舟の客對岸の人となり、また莫言他郷多苦辛。同窓有友自相親。柴扉曉出霜如雪。君汲溪流我採薪。の如き和熟の真味も領するなく、顔回が陋巷の樂を夢にだも見ずして早く首陽に飢に疲のれむとは、おろのや汝、何ぞ生活の難を訴ふる、看よ生活の容易なる、今日の如きはあらず、譎詐も施すを得べく、權謀用ゐるべく、詔諛亦最も可にして、正義亦踏むを要せず、情に依らず實に順はず、さりとは寛大なる欲界、功名富貴を拾ふより易しと知らずや。迂あるうや汝、堂々社會の制裁を言ふか、何の危懼ぞ、一撃粉碎すべし、一拳打破すべし、諸は人類の道義といふの、敢て破るもの之と才子と稱せられむ、所謂天下れ英傑をして悉く足下に跪かしむるも亦易々たるのみ、吁富、偉ある哉富、人の黄金萬能力を頌する故なくや。は、吁紳士あるかはた一種の職人なるの、服従を喜び、利益を尊重し、主義もあければ定見あり、亦見識一もあるなし、彼等の能は只末枝にあり、特り叩頭百拜にあるのみ、心せよ汝、世間何ぞ其人の多きや。自由を尙び正義を重んじ、亦主義あり定見あり、彼は誠に義を好み、仁に當つては又其師にだも譲らざるもれ、看よ汝、世間何ぞ其人の寡きや。秩序整然たり、威儀堂々たり、百官星坐し百僚各其職にあり、其結構其組織亦盛なりといふ、問へ汝、其目的、其主義は問は、冷淡なる卿相果して之に應ふるれ勇あるや否、噴飯の極み汝何爲す之を思はざる。吁清廉を

樂まんり、はた富貴に誇らんか、恒の産なきものは恒の心なり、衣食給してぞ始めて禮節を語るべし、哀むべき哉人情の卑劣ある、聖賢に非るよりは遂に清貧に安んずること難しとや。諸も頼まれぬ世の果敢かさ。時運眼前に走り、天理は多く背後に現はれ来る、一は一非一利一害、遂に鴉の雌雄を知る能はざるに畢らんのみ、されはや、欲界の天高くして宏しと雖も、義理人情、行の詭變脅迫、蓋し疑懼より胚胎し來れるもの、果究まれば業苦早くも迫る。人間五十年は星霜、あるは活人劍とあり、あるは又殺人劍とあり、電光も遅く石火も及ぶあけん、夜鶴曉猿の怨多きは又更にいはずもあれ、痴雲清光を妬み、螢火月明を忌むの類として、また人を恨むにも詮あるべしや、赫々たる陽光は蟻蟻の穴にも光を惜まず、さりとは又憎まむ世もなく、怨まむ天もあるべうらず、何ぞり出で嘆き啣たんとはする。まことや尺蠖は伸てまた屈む、衰勢は水の低きに月影も、よし暫時は浮云にのればとて、懸ては又濁らぬ水にうつりて見ゆる時も來らむとぞ、さて此曉は誰憎しともおもはず、又誰怨めしともおもはず、まこと怨敵は却て道の師なり、怨敵まことに福音を廣らその師かりと知れ、汝悔あるべからず亦迷ふなかれ、萬の事、喜びも、怒りも、哀みも、樂み、愛み、惡むも、皆眞實なりや。れるかや汝、疑は疑はしく、訝うれば訝かしきことこそ、詮する所一切の名目、何れか畢竟の主人なるべき。……

聲すと見れば姿なり、思へば夢り夢ならず、萬古長へと颯々たる松風、離々たる草を吹き靡らす間に、悄として殘る骸一箇。

薦を被るの金銀はす、俚諺

文 苑

ODE TO THE DAISHI KOTO GAKKO.

(1)

De Havilland.

Our Fourth shall always be
A type of all that's free,
And we its pride
Sons of these isles so fair,
Far from our homes so dear
In hope we'll live each year
As terms fast glide.

(2)

Our School we deem the best,
On it our hopes we rest
And sing its praise.
May all deep friendships born

When soon apart we're torn
Shine brightly forth as morn
Through all our days.

(3)

Let us all feel while here,
As though our friends were near
In work and song.
Never shall we forget
Old friends no longer met,
To whom we owe a debt,
Of love so strong.

(4)

Our course will soon be run
Life's battle soon begun
Success is nigh.
When our last leave we take
From true friends sadly break,

Then each shall graduate
And pass out high.

(5)

Then as our lives unfold,

We shall our Fourth uphold,

While years roll on.

Such love we feel for thee,

That whereso'er we be,

Thy gates and trees we see

When far we're gone.

Parody.

How can we e'er forget

That land of cold and wet

In winter's storm.

Hands in our pockets deep,

A strong desire to sleep,

Around the stove we'd keep
Ourselves so warm.

胡蝶錄

文濟ぬしのなめなぬのことに困してされとぢまくのわれのさるわざにしもう
かつくへる此の頃此をと思わられる品もぢまものをと流にも云はせけるをひたす
らにゆるし玉へらんの氣色も見ぬはさらはとて日記の一節をさきてかくは名付け
たりつれなきぬしのさま指をもと思ひうらなるとまをすは

ちさのやのあるし

花

樵

人

あめふりし先きの日咲きをりの折にとてくり初にちきり置けるをけさ使して友垣は一重をら
すかねでの契り驚かし聴えずとも叩らせ給はましと待渡り侍るをなと怨りて明日はゆきともふ
りはへて花はゆふへこそさわめて馬にくらおかせてよのねもふろの消をこ實にや行きくれて花を
一夜の主とは風流のさむたちのまさひ也けり我身世にふる徒のちのめならねと垂込めて春の行衛
も知らぬまに花散らす風のやとりは誰のしるわれに教へよゆきて怨みむのちけさの下えたりとも
なるはうし昔者南禪寺の櫓門のわけのをはしまに濱たまさよによる白波の魁れ破鐘のひなきに稱
へたる春のなめけふを一日くれきはちけの花け影かは

山水蹇を得て易者を花に怨みけり

詩のいへに花神を招す遣けん

うつなみの世や美の力の善の力にゆつらさりけりなよき人さあらぬきは男も女もをしあへて撲つて一團の看花のむねわれも數に入りて坂ののら願すればはさむ櫻花梢ひきく交りて途はさなから白雲の洞の如く立ちつゝく人のさまおほしと云も世の常也

花にうもれて死むと申す從兄弟かな

あふけは四十五尺ななひく櫻に匂お雲の根ゆるく緑の瀧の糸白く枝さしうはす千よるその木立齧の莖かいとあせ

雌千尋花に日残るかかれのな

采女の身なくとて衣うけしにはあふてかすみ池のほとり青やまのつねより水かさましたるに糸うちたれたるいをやつるらんと思へて玉島川の昔の胸にそ浮ぶめる

思多端さつて柳にたく遊ぶ

舟はありてはしどあゝとわかき鳥のなまをひそのにうらみてなかむればその梢とも見えざりけるを様々の花はあれとはるのひかりをわつめてにはお櫻の色にあらはれて松こそは花の絶間也いりといふも恐ろしき松かけいとさひたてる岩御堂さゝのそきたればゆへありけなるいしほとけし眼つゆまゝるかきひやゝかがるかんずのた月も花も動かし難けあり

はる雨に朱唇はけたるほとけ哉

武尊を脊に牡丹の妻あらて石橋に立ては川をはさみてささつゝく雲一むらなりく通ふ風に誘は

る花の半らは水の上になからは空にまひわかりて袖にふりのれるさの渡りのさては南都のおほるよに水とりのふる事さへそ

こひ詫ひて笛に落花を泣きにけり

花を出て花に入る河の水あさし

手まぐらのまろねれ夢に閨更けて戸桶にあつめてまける春の雨に曾波の眼さゝ露にほひ不言の唇をみそめしみかわ水の邊流を縈くつて羽觴を透くれはたくみわたるは思あううてとくこや待つらむえぬはあかれにひられて遮く過を遮さらまほしきけはひをうしうのとやのさる遊びは絶えて幾星霜さゝれゆく水と紅葉やまの木立いよしけりゆくものを

上琴すゝく花に内侍を召し給ふ

芝生のうへにむしるなごひきてうだけそる一群ありつとひとり若き男の近き木かくれにさりてしはふきして人を誘ひまねくに井の端の櫻はに十文字に足よるめさいたりてさゝやくはやりて手もて制し齒もあらはばるみけるを袖もて蓋へるは

聲たのゝ花の御宴を機會かな

なと古めきてせかし

まさこあたゝのにうきつはたの心からよりぬき出て生へるにかせそとそよりわたるものどけくでせしたうへの羽うちつれて花のものとすゝろありくかけさへ水に映りてなまめかしさを誰なりけむわかうとの酒に匂へる聲してつゝくしとうちあめるもをかし

衛士どもの花に恩賜の酒を汲む

はかしくしきみはえは若木にゆつりてのあはれてふ言葉を多くやらうとく夢まどかある大櫻の影
見渡そかきり花やあき錦に匂ふ市の遠近心は胡蝶とありておのきよこの花よしとさまよひいて
骸はもぬけのをうえなうぬにほひのうをれるにはつかしや心どきめきてみるへれば花の精にや
あらずや

夢のまゝに董の蝶の死をむ哉

花のあめ小蓑の下のきぬあかし

めのごにうそのせにやさしき験はうちに花しへをつむ様にどちらられてありかたき様を見るく
も肩にかゝりて誰れやらかよさうらなるの風車いたいにされるかへり手の若葉をす手のやの
てはまれ榮のつゆ霜にのみてもみち葉のわけにくれに虚空を掴むらんと思へはすさまじう世をう
ち山と詠したる法師ゆかや

春雨の野てらをたゝく白拍子

こゝらつとへるあまたの人のくれゆきし春を手枕に忍ひ腫なりし月影のねひくれ竹の葉のしけみ
もれて冷しく蟬の羽衣木隠れて忍びくゝに露にぬるゝ際に花染ころもぬきうてに又しも花に分れ
ぬにるなとはかりに心は花をいたふやいくたりおほつたはしろき單衣をめつらしみ未遂にしき
奇すへき紅葉はみこりはねあし若葉のうけにすさむらんかと思ひつゝけて踏まよふ練兵場の巽つ
いちのくつれたるに大さにはあらてされと花咲き匂ふ李の若立に袂かきやりかとしたる目立さと

けなるか登りたれば帯もしころにきぬはこえたるうゝの木の下に立ちて我等は源氏袖しるしには
にけあくよきあそ語合ふを得たりとや平家の殿原よりきて木を引きゆるかすにあやふかりて猿の
やうにかいつくもあはれしはし行手にまよへるも友かりまたきにと猿丸の宮へこたとり行く小川
傳にすくゝと枝さゝひあふりてあらぬものおもひと思ふまで末はさうしよにまゆひろこりて例
けなまぬのしきをあらず春の面伏せする川柳とや芽催すに小供のし高あさるこて立ならずもを
かし

女艶にはささかまゝき鬚こりな

袖ひちてよき兒のあさる目高るあ

いみくきはやかに黄に匂ふ菜の花の波の上ときうそきいろくゝのうはほり一叢散らすは惜き春
風に梢は知らぬ花の白浪岩こゆる土橋を渡れば手振をかしく若き女どものよそひさへあるを老た
るの若やういけにみさをくれるもありて行會程はさまつくりて上手めらしのゝましけありける
をやりすくせはねのうゝのしりあふはうたてなりける様にみそは

湯にありて花を語らふ姉妹うな

姉の兒を妹負ひてはるのくれ

水にすむ蛙の歌うらゝのに櫻浪よる小田の苗代水にかけ見えて畑うつ女の装のろちか也
邊に事あり女ばかりの田打のあ
雷斧得てはた打三日やむてけり

道分れて右にさらば左せんとする家居の垣ついでひろけにて幼き兒の少さき手に心のまゝに春の形身とか摘むやすみれのかほかれはゆりの色こくされどつゝましけにさゝやかなる様したるに日うちくゞにさしてなつくりみ一夜ねにけりとさへ云ふものを垣をへたての田を高く思ひあさりて雲雀は何を雲井にきこゆらん軒近く山吹のさけるに鶯の遠音りくこそは

劉白ううたには早きはつか哉

宮に誤ふて終へてえんにとしのせ雜木をなゝめにさすや日影を身にあひしはし眼をふたけて雲井遠く羽のして自然の妙音をもてあそぶ雲雀自然のりなつる水の音にわれかけしき理想の世にきまよはんとするにいとあやしきけわひしてよりくるものあるに三日月のはつりに見開けば犬なめりわれのみならず夢やふられて胡蝶の立ち揚るはしに笹と大木れ下枝とにはり渡せる蜘蛛のいに羽うちうけたるあはれさに勞はりあかりはらひやれば猿九塚のたより小さき白き蝶羽弱く舞出たりけるの互にうちつれて同じ若木の櫻の花うとき枝に羽をやすめりあしみあひのら運明をのたり合ふにやあらん南に向きて居ていつくしの羽をふたゝひみたひあふきくゞてされと立たんともせさりきまたらの匂もかほろがる犬はきさはしの下に後へは疊みてのへたる前足に頭をのせて眠れる様れ思事かけかに見ゆるは如何なる夢路をたどりやすらむ

草もゆる傳野に胡蝶の影もなし

馬遊ふ花山のみあみくさわりし

今はとて友のりいそきぬ

菜の花のすきかにあゝる夕のな
盡く院のつはきのしろよりし

此のつゝき猶おほかれとさはとてそてけり見む人學ひて得ざるを笑ひて

舊狛にうくひすうらむ燕語のな

となとしり玉ひそ

汲井輪

幸運と我こそはい

紫流麗瑠氏う煩梨鳩羅提須の指輪譯してか

神めくみ かれは荷へり

くは命名しつ應答の辭は批點を附し之れを

其のうみに 肩比へたる

明にす

族輩いま 頸いぬく

高きやに 袂つらねて

さは云へこ かりやの灯

見晴かた 知らすサモス

影寒く 怨に征矢を

之皆は ねのか御苑生

うちみりく 人有てふを

山清く 鳥は囀り

そり眼 血にあく極み

水白く 魚ひれふれり

幸と 我は云はす

埃及の ときし返見

言の葉の 散のまのひに

一聲の 嘶高く

ミレトより 使來れり

芹かつ菜 鱸の廣物

疑のはら 酒充てならへ

神祭 たへ辭をい

常盤ある 若木の桂

うらくと み髪にかさせ

待ちある しよの建も

一すぢれ 槍の鋒渡る

稻つまの 消えし趣

ボリドルの 仰のしみみ

ひた馳に 到りたるはか

生々の 血潮のくひい

視出し ふたりのなりめ

若くさの 色も物かは

恐はた 驚くこきし

幸運を いめな頼みそ

憂たけの 聲のにほひや

酒うたけ 菖蒲の軒の

夕波に 消にしためし

夜のほこも 後めたきを

和田津海の すさひに耐へぬ

軍ふね ささりを迷ふ

云あへぬ 言葉のすゑを

なる神の 落つるか突噓の

高さやを ひよきとよもす

雲墜坐 むり伏すうきり

ま帆片は 船のへみちて

いりし玉 照妙のあや

ほて高く 眞棍しぬき

故郷に 今も歸れり

おち恐れ 驚く王

なりさちは 日照る見すや

白雨の くも峯移り

雞冠花の 風に私語く

クレテルの 雨なすしの矢

入相の 沖遠しるく

うちよとる 浪の荒いそ

まさくと 夢としも無し

唇と 青うな原と

とちかそも 言の葉船の

漂へる はしにさゝ波

先き立て 船と寄せけり

勝戦 こゑのちよろつ

男武し クレテルあはれ

文苑

神かせに 藻くつと消えて

鹽沫の うつ巻をかし

聴きして 眉はひそめり

實にさちと 我は壽く

禍つ神 すゝるありきの

道の邊の 董果無し

花の彩 椽の匂を

青柳の 糸よりかけて

一くさに 咲せてある

現世の 姿なりけり

ひと度は 我もあのこと

酔伏は 小女かひさを

枕より あとより幸の

せめ來れば 詮方を波

拾集む 實にせまく

怨れし袖は縦貫
線しさに 亂れさそれ
朝顔の 釣瓶也けり

澄渡る つきに叢雲

動さなき 眞理にあれば
ひとみ片 おか幸福の

花散す 風をたし祈れ
ねほけなく 現み神も

老せしの 奇き薬を
不死の根れ けふりこあして

み心に まるせさりけり

八耳の りひなの補の

なる祈 うけてをあふは

結置く 汝の友かきの

言の葉を 榮とは爲て

思出に 咲のをりの

花一枝 た折りてもすて
世に惜みの なれの寶を

我からと みるめに隠せ

言の葉の 末をと渡る

朝のせの 肌裏寒る

白銀も 眞珠も綾も

なにせんに 勝れる寶

如うめやも これのを指輪

捧げ南無 女神のねたみ

うちこけて さち守るのに

浪の花 黄にさかめけり

旭さす 海のにほひや

綱引する 影ものこけし

浦傳ひ 足れる面半の

海人の たどり來る見ゆ
年波の 幾重經ぬれど

聽きませぬ 魚にさりける

いつくしの 君うれもの

數こしも なりやなふすや

畏して 大御饗にと

このへし 魚のし腹ゆ

さへさへの 氣勢いみしく

大前に ひれ伏もせて

見ませ君 かれのをよひ輪

あわ高に 末はふるへり

汝うさちは 濱は眞砂も

有數の されか幸りも

耐兼て ちれ思に

沈みつゝ み空を仰き

文苑

語らひは 今日に限を

なの肌を 雨や汚さん

かり骨は 神の手にあり

徒に なれとは死な

さふはこて 縁のよへる

水や空 こさりの船れ

影幽の也

友よ贈る

朗

月

花の夕の雲は雨

そげばしめる香をとめて

水に歌ひし春れ日の

夢やうつつをさますのな

落葉や秋の山蔭に

松の末吹く夕風を

あはれ浮世と感トたる

思ひは同ト夏の夜

君たのしみの里に住む

吾は浮世の風すさぶ

都の空にさすらひて

忍ぶ昔の夢の迹

迹ごめくれば五月雨は

しきる情をうけし身は
しのゝめ毎に聲あげて
人やいかに祈るかあ

風にまうせし雲の身の
行方やいつく夕端山
紅匂ふ折々は
來ても訪へぬし我宿を

北海の怒濤激する巖角に嵐をよびて叫ぶあら鷲

汚れなき雲の高根のふる寺や上人老いて梅は花散る

朝早く水仙いけし妹のゆふべ九獻の盃に泣く

夕日さす山蔭に秋は深くして乞食眠る紅葉々のもと

若葉もる真如の月を友として經讀む庵のたをやめは誰ぞ

秋の暮傾城酒にうづもれて昔の夢を消さんとぞ思ふ

母上の静けき場所とのたまひしみはうのはどり董ちりほら

天人の降りるてふ峯に風清く月あかさ夜は歌の聲する

龍澤

太郎

松月

紫仙

朧月

花散

霜枯の色かき野邊を血に泣いて失戀詩人ひとりさまよふ

雨後棟 五月雨の露ふき亂す朝風にあふちよほれて香に匂ひつゝ 松江

月前水雞 八重しげる葎の宿は月冴えて外面の小田に蛙鳴くなり

鶉飼 長良川鶉舟の箭影淀むあたりや鮎のよるせあるふむ

松風 松風は神のかかづる琴なれや弾く人なしに弾くと聞えて

早苗 時來ぬと小笠傾ふけ里の子がもせずをぬらして早苗とるなり 定郎

七夕 淺のらぬ願の糸の結ばゝる年に一夜の天の川波

寄蚊火無常 蚊遣火の立つのどすれば又消えて常かき世こそ忍ばれにけれ

蕎麥 白ばらば君がらざりに紅は我が胸のへにさゝんどぞ思ふ 愛花

贈りつるさうびの花を頬にあてゝ流るゝ涙君押ふらん

失題

紫

影

春雨に煙りこめたる里川の馬子は橋行さ馬は水行く

山川の淀める淵の岩れ上に危く咲けり石楠華の花

大寺の棟にゝらめる鬼瓦鳥さうして瞬きもせず

里遠く鳥も飛ばざる廣野原一人し立ちて鳴神を聞く
いひし事せし事皆の恥りしきさめつる酒の長さ夜ながら

夏季雜咏

夜に入りて静まり返る幟哉
屋根葺きて葵に近く晝餉うか
使いて三條戻る日傘かな
灯をとれば水雞逃げり夜の風
松風に松れ花散る蟻の道
邸に入る水れ分れや花菖蒲
順禮に粽くれたる六月哉
先代の乳母が来て巻く粽かあ
ひいさまも二つ巻きけり笹粽
むかい腹に公達多き職かな
風をかみ五月の鯉れ鯉をつる

道のへに清水流るく柳かけ
しほとてこそ立どまりつれ
西行

記福島中佐遠征事

村上 函 峯

信州固爲山巒峻秀之地。是以自古出瑰奇特絶之士。若木會義仲之雄武。太宰春臺之古學。佐久間象山之洋學。其尤表々者。而陸軍歩兵中佐福島君安正。則以遠征著稱云。君信州松本人。生而聰慧。早失怙恃。甫八歲讀書講武。即有四方之志。明治二年。從藩主來東京。脩英書於開成所。又學瓜生三寅。早稻田北門社。家貧資乏。而刻苦磨勵。祁寒暑雨。未嘗懈怠。業益進。六年出仕司法省。尋轉陸軍省。於是益肆力地理學。傍脩外國語。遂通英佛獨露支那等語。奉命航米國支那朝鮮印度。察其形勢。任中尉。廿年以歩兵少佐。屬獨逸公使館。叙從六位勳六等。二十四年。任滿將歸。官命巡視露清之境。君躍然曰。可以成吾宿志矣。二十五年二月十一日。鞭凱旋。發獨都。凱旋者。君所購良馬也。三月二十四日。達露都聖彼堡。四月二十四日。抵莫斯科。又行二十里許。凱旋斃。蓋連日以驅於冰雪中也。更得名馬烏拉於莫斯科。六月八日。抵加森。嚴寒俄變酷暑。於是晝寢夜行。約五百里許。道路頗艱。東踰烏拉山。是界歐亞之山脈也。遂入西部西比利亞。會惡疫流行。數見病者。投所携藥。皆額手相喜。九月二十三日。登亞爾泰山。窮其絕頂。是爲露清界。乃以小刀刻姓名於巨巖。笑曰。汝亞爾泰勿誇高。吾昂於汝數尺矣。既而入外蒙古。寒氣益甚。溪水凍合。不得飲。乾羊肉外。無一穀菜。爲病胃。無醫藥之可給。加以風雪凜寒。乃養病穹廬。夜則焚乾牛糞。以取暖。終夜不眠。唯聞狗吠暗暗耳。如此涉旬。又窮東部西比利亞。某月某日。屆伯拉照夫琛夫斯克。是黑龍江會清奇里河處。還入滿州。歷吉林靉古。遂出浦潮斯得。乘船而去。今見

在_レ某地。盖君之在_二行旅也。閱_レ月十有餘。行程三千八百八十里。孤劍鞭_レ馬。跋_二涉深山曠野不毛之地。冒_二瘴煙。衝_二毒霧。或爲_二土藩所_レ狙。或爲_二猛獸所_レ逼。瀕_レ危者數矣。然每_レ入_二都會。將校貴人。皆送_二迎數里外。莫_レ不_二款待。露國皇帝皇后。亦延_レ許_レ謁。且賜_二陪食。其見_二敬重。如此。夫露清接_レ疆。常睥睨不_二相下。一旦開_レ釁。則駭_レ乎將_レ及_レ我邦。則爲_二我將校者。不_レ可_レ不_二窮疆場。察_二風俗。以講_二籌略也。是君之所_レ以爲_二國家。不_レ辭_二艱難也歟。嚮_レ皇上嘉_レ之。賞以_二金二千圓。又累_二進陸軍步兵中佐。盖特典也。嗚呼山川靈淑之氣。果出_二此偉丈夫。其舉實卓越乎千古。義仲諸子。有_二不足_レ道者也。况君年方強。將來可_レ盡_二力於國家者。不_レ獨匹馬萬里之行_レ也。頃同鄉人辻君新次。與_二篠田某等。謀。欲表_二章君之偉業。遍索_二詩文於海內操觚之士。余乃據_レ所聞以記_レ之。

雜說一

明石華陵

有傭夫得千金于途。懷而歸家。不知所藏。繫于床下。坐臥其上。每出必取杖叩之曰。孔方兄在乎。歸又叩之曰。孔方兄在乎。鏗爾而有聲。則始得安息矣。會夜風雨剝々搖戶而已。以爲有盜闖焉。終宵不敢交睫。既而怒曰。吾得千金。以爲可安臥而食矣。未及十日。既覺面肉之消。乃投金于河曰。不如爲傭之安也。噫世之貪財者。豈徒面肉之消也乎。營求謀爲。至死而不悔。其不及傭夫也遠矣。

佐田茹齋評。警世之晨鐘。使人心灰。

二

有犬守門。誤吠乎主人。主人怒鞭之數百。幾死。貓兒旁視而笑曰。我終日安臥。猶不失食肉。汝守門且暮不息。誤吠主君。幾死。汝之糊口亦勞矣。犬見而大笑曰。人之畜汝。以捕鼠也。汝得主嫗之寵。安臥而飽食。不復知汝之所職。主嫗今死。汝欲食糟而生。不可得耳。汝來進。吾將使汝不及禍也。乃一嚙而斃之。噫世之恃寵而傲者。猶如是乎。不一嚙而斃者鮮矣。

木原老谷評。全注意恃寵。假犬據憤。只末局正論。滿腔是慨。氣自冷然。

三

善御馬者。寬其羈縻。以隨性之所在。故無嚙蹄偏狂之癖。而其行愈健。善導水者。濶其隄防。以從勢之所向。故不致奔迸衝突之患。而其流益遠。夫民亦然。不强爲之法制禁令。而從其故俗。則不罰而民遠惡。不賞而民移善。若夫御不隨其性。導不從其勢。而遣之難行之地。則不爲害者幾希矣。傳曰。導之以德。有耻且格。

加藤益堂評。已上三篇。蓋傲韓文。而文體反似柳子三戒。可謂善學古者矣。有井進齋評。三篇余竊以末篇爲出色。以其法度極備也。

雖有磁器不如待時之解

舊作

竹

溪

潛於深淵。水波不揚。窈冥若無物。一旦乘雲興雨。神其變化者龍也。隱於幽谷。怪風不起。髣髴若無影。忽然入夜。乘闇震其魔力者。魑魅也。魑魅之震魔力。龍之神其變化者。是其能也其技也。

雖然不得雲。則龍不能顯其能。不乘閭則魑魅不得震其技也。是不啻此類而已。於人亦然矣。豐臣氏之赤手握天下。德川氏之一舉建十五代之礎者。豈無得時機而可哉。乃光秀之弑其主者。是豐臣氏奏偉勳之時也。淀哲婦之橫肆而傾其城者。是德川氏鴻業之時也。蓋二氏之得光秀及哲婦。猶龍得雲、魑魅乘閭。蓋可謂得好時機者也。夫時機者天之所定。以漸而變。以漸而成。如黃鳥之囀於艷陽。雲雀之舞於昊天者。此其時之所至。猥求之而不可得也。若夫豐德二氏而能不待其時。遽欲為其所欲。猶欲黃鳥之囀于冬雪。雲雀之舞于春花。其成不可期也。宜矣雖有鐵器不如待時也。作之解。

漁翁之言

樵

谷

余一日遊于犀涯有衆漁者下竿則得魚傍有一老翁垂竿數時無一魚入于籠而其竿其餌莫一異衆余謂曰今見翁之釣魚與衆同而衆人得多而翁獨不得何也翁曰嗟呼宜矣子之問也然子知其一而未知其二也察其外而未察其內也吾釣魚也不為險危又不為枉理而得故不得也衆人貪魚之多而不思傷其性也亦雖縉紳備位之人殆不免釣者之弊子亦知之乎曰不知也幸請指教翁曰然則為子語之夫事君者以甘言惑其君又為險危求見信或至于干以舌頭使人患死其實多端官于相國祿兼齊晉然及其一旦醜事敗露身被鼎鑊之刑罪延干從族使先祖不血食見臣而不忠子而不孝尊而不下人故惡與此等同卿詩曰投竿于有昊蓋謂之之太甚也而正直者只知守其官而不旨論于君雖卑位不敢怨望又不譖毀人若一旦得志則上匡君心下潤百姓而身安家榮子孫蒙其蔭死永血食乎廟是則速升易墜順踏不墜之謂也今子雖未備位于官亦有為青

年而不察此等人却咎漁者之不得魚豈亦不可笑之已甚乎哉余默然無以應退而思其言以味其真意豈其醜態於君臣也耳哉邇徵之子學界一校之內情亦往往類之者不寡也堂々男子屈首如無骨亦更惹盲者評鼎之隤矣吁脚下照省強惡德之賊也耳若夫翁者所謂古之逸士者歟

望江南

戲咏巴黎四時景

金井秋蘋

巴黎好。春埒馬蹄驕。柳外雕鞍公子騎。花間繡綉玉人招。奪下鬱輪袍。
 巴黎好。夏木絲陰繁。風透羅衫香近遠。天低鐵塔月黃昏。乘晚步公園。
 巴黎好。秋水照新粧。堪笑柳腰如許大。不知蓮步為誰忙。賣菊近重陽。
 巴黎好。冬夜舞筵開。曲奏離鸞鳴不住。人如飛蝶去還來。窓外曉寒催。

偶成

曾向歐羅賦遠征。輕衫俠少一書生。偏憐磊塊填胸在。漫道功名唾手成。紫陌紅塵春結客。青樓明月夜談兵。如今風雪金城路。可是屠龍技未精。

臨行賦似諸生

吾昔聞之孟軻氏。人生患在好為師。從今放浪江湖上。賞月陰花筆一枝。

予家藏孔子遠孫衍聖公祥珂所書匾額曰賞月陰花

臨別賦拙詩謹呈矢板先生

黑子軒

流鶯鳴繞尾山畔。垂柳繚風犀川涓。金城城裡好風景。况又試業期逼時。何料先生棄生等。今日參商嘆別離。別淚潛々禁不得。惆悵波盈雙眉。杜鵑啼破校內樹。斜雨濺盡門前籬。莫怪生等爲婦態。由來難得此良師。吁嗟聚散何無定。昨日戀々共交頤。今日匆匆相分袂。人事渾是似秋葵。

花月險

以花月二字押韻

子欣孚

滿簾花影滿簾月。一刻千金在月花。月如桃李芳園月。花似當年筵前花。一痕影清濛濛月。千點香遍艷麗花。濃霧封梢花映月。淡煙迷庭月照花。霧濃々裡吟步月。煙淡々中醉眠花。欲養天真靜對月。欲慰旅情暫契花。須臾浮雲蔽明月。倏忽斜風損美花。世事盈虧恰如月。人生榮枯亦似花。去歲家卿吟花月。今年天涯賞月花。吟賞無敢損花月。高天何意妨月花。天邊空濛不見月。庭中黯淡不辨花。難尋惠連吟醉月。叵追康樂幽賞花。盈虧天也何恨月。開落命也何惜花。今年月同去年月。去年花似今年花。獨思人事空仰月。轉悲吾生徒羨花。少焉雲收天吐月。落月牽情照落花。

呈鳩園詞兄

輕薄輕薄也輕薄。世人交情堪痛傷。有金相好無金惡。睚就反目更無常。飽食暖衣只爲樂。無信無義爲利忙。道兮德兮口空唱。心裡險說似豺狼。與君交結已數歲。朝分食兮夕同床。二人同心如雷陳。不似紛々世人行。燈下吐懷照肝膽。机上繕論書文章。春朝探花金城畔。秋宵賞月犀川塘。相救緩急共苦樂。不須險說豺狼腸。縱令千里遠相別。溘漆締交君莫忘。

偶成

賞月金城三五夕。探花芳野艷陽晨。春秋風景資文筆。不啻吟花弄月人。詩成手插木蓮花。醉去闌煎絕品茶。人若欲談風韻事。來尋黑子道人家。

山中鎖夏(後)

龍山道人

曠然避暑在僧房。詩酒相酬萬慮忘。寺古青蘿裝舊壁。園荒白石護頽牆。松風掃榻心魂爽。竹氣侵人笑語涼。只覺晚來有幽致。對門高樹日蒼々。

詠燕子花(前)

漢宮飛燕太多情。化入春池媚態輕。綠葉蘸瀾朝旭暖。紫英搖檻手風清。溪孫今日爲昆弟。杜若當年一姓名。遺恨藝園無謝眺。王孫千歲檀芳聲。
王孫者指在原業平朝臣
時鳥啼きつるわさにあきれたる

後徳大寺の有明のうは 赤良

批評

第二十三號櫛評

綠東野人

批評の難きは今更贅せずもがな。さるを短才無識蛋糞ほどの批評眼なき我等如きが敢て諸子の金竹に是非を挟まんは誠に罪恐ろしけれど、折角の早鮮にも生姜の無くては、興味なきもの、只思ふ一端を書き付けぬ、固よりさかの生姜と知り給へよ

批評

前號は杜撰なる者よ、粗雑なる者よとの非難ありしが、本號は兼て編輯子と仲善の飛ツ栗屋主人が内々忠言せられし者う將た編輯子が前過を償はんの憤發に依てり、体裁も紙數も先難無ものなり、

論說欄

本欄は我半千の同胞が元氣學殖の發露する所、其振不振は以て我同胞半千の元氣の消息如何を卜するに足れり、而して近來何不落眞振はざるの甚しきや、吾人は本誌の古を懷ふて今に至れば慨然筆を投して嘆ぜずんば非らず、詩人の覺悟は再び出さるか、莊子管見は再び出さるか、前評家諸君は勵聲疾呼して本欄の氣餒の揚がふんとを望まれたり、而うも吾人は同様の愚痴をござるを得ずとは情無きふとに非くずや、最近數號に就きて回顧せしめよ、政治と法律との關係、戰爭論、漢學に就て、シヨペンハウエル天才論、商社會社の經濟上の性質、僅々五篇而うも學生の製作は僅に二篇のみ、吾人は之を以て我校の元氣を發揮し得たりとして恥ぢざるを得るの、我半千は同胞諸君よ、吾人は諸子が英氣の鬱勃を信ずる也、學藻の豊富を信ずる也、唯其餘りに謙讓にして自ら卑うせらるゝは却て諸子が爲に取らざるところ、何ぞ馬を我壇上に進めて、滿腔の大氣餒を吐りざる、其學術的議論たるを慷慨の時論たるは擇ぶ所に非くざる也、

矢板教授の商社會社と經濟上の性質

是れ先生が講學之餘暇を以て吾人に示されし者、合名合資株式各會社の性質を述べて各其利害長短を明かにせられたり、詳しきとは法學研究諸君の任務に譲り、茲には唯先生が常に本誌を顧念せられ、徒らに自ら表置して所謂超然主義を取り給はぬ御熱心を謝すれ外なし、

史傳欄

浦井教授の史海指針

曩に先生が前後八回に亙りて掲載せられたる僞作文書研究の一例は、本誌の續うん限り、先生を不朽に傳ふるもれにして、史海指針又數回に亙り、本號にて漸く羅馬の部終る、其簡朴にして虚飾なき文は、以て先生の賢實沈厚を證するに足り、該博深宏なる先生が學殖知るに難からず、吾人は先生が益々此種の有益なる高示を垂れ給はんことを望むと共に、云ふまじき申分かれども今少しく各書の内容を極めて大略に教示せられんこと切望れ至に堪へざるなり

齋堂小史の西と東

大膽なる題目を擇ばれしことよ、吾人は陳腐に流れず茫漠に陥らずして成効せられんことを望む、但潮來先生の去り給ひしは甚だ本欄の爲に惜しむべしとなす

雜錄欄

紫影先生の十番諺合

歌合句合はまどふりにたれど諺合とは新の新なるもれ、奇の奇なるもの、恐らく古來うゝる事を試みたる人は一人もあるまど、我等は餘りの面白さに、團栗からぬ穀頭を打おで、大笑し侍りぬ、先生が博學諸書を涉獵して此種の俚諺の蒐集につとめ給ふことは每號の帝國文學にて吾等の承知する所なるが今又かゝる俗題を捉へて滑稽に詩的化せられたる所、誠に先生が俳想の大あるを窺ふべきなり、取組はいづれも妙々、あるは朝汐梅の谷が突き合ひ、あるは鳳凰源氏山のなら

み。勝た負たは時の運として、各力士にも行司のさばきに意存は無のるべく、見物の我等いらざる差手口に、評者の目をくしれなご恨みられむも恐しければ、各方に花を持たせて明日は取組を待つになん。

三諸先生のわが家の冊子のうち

先生が學餘書きつめ給ひしわが家の冊子の數節、編輯係より何をかものすべく言こされたれど云々の御斷あれば何も云はト、山田勘解由れ事は面白く讀まれたり、他の古文書の抜がさは趣味も無きとなれば、今少し憤發し給へ吾人は曾て先生が帝國文學紙上に、婉麗なる筆を揮はれし勇氣の程を慕ひまゐらすものなり。

俗露濱子の迷へる西行

俗露濱子は如何なる傀儡師ぞや、一个の奇僧西行を人形にあやつりて、自己の胸中を描き出し繪へるらきよ、所謂人の酒杯をかつて自家は磊塊に瀧ぐと云ふもの乎、我等は子か或點に於て西行の面目を活躍せしめられたるを喜べども、若し斯世を以て絶對に惡ありとし、若くは善ありとし、之が爲に悲樂する者は、是徒に境遇に執着するの狭量漢のみと、叫ばれたるに似氣なく、單に彼を自家主觀の模型中に鑄造せられたるは、先づ悲しう覺えたり、殊に彼の悟脱せしは晩年計らずも其妻の尼となれるに逢ひ、次では其曾て蹶落せし兒女の剃髮せし時にありとすと、やゝ窮したる言方に非らずや、然れども事實の詮索は却て子が本意に背く者あるべく、矢張俗に迷へる余れば、彼嚴平石れ如き野狐禪れ輩を笑ひ、寧ろ血あり涙ある迷へり一時の俗露濱子を慕ふや切な

松○下○花○樵○人○の○古○物○語○に○見○は○た○る○雁○の○玉○章

落窪、竹取、さては榮華大和の古物語より抄き出されし樵人が根氣はさるものなが、連絡も無きひと節、我等には何等の意味を與へずと思はる、あかもトをすくめ蟹匍ふ文字をま、へて才がるは男の子のみりはをみあまでも然る氣色ありてほどく人からさへはしたげなるうたは痛き際、云はずもあれさど、保守めきたる熱吹うせ給ふは釋氣愛すべきとは云ふもの、かかもト蟹匍ふ文字あふトとも子が文才を以てしてせめて近松、馬琴等れ御研究こそ望ましけれ、
エンケル氏の Lautmalerei in der Sprache.

目もくるめく獨文、毎日の日課さへ碌に字書も引りさる我等横着者には精讀の暇なし、氏が得意なるシルレルの鐘の歌を引き、一種の西人的眼もて諄々説る、數言、蓋し吾人を裨益すると少のふず、茲に氏の熱心を謝す、

文苑欄

本欄は華麗絢爛なりこの評を聞きたれども、我は却て其評の誤れると認む、殊に近來益荒蕪にうつらんとするは、嘆ずべきことに非らずや、本號の文苑評は亭々生より豫め申込あれば我は略す

x x x x x x x

比較的大なる範圍を占めてしかも氣焔酷た揚らず號を逐て荒蕪に歸せんとするものは文苑かり。吾曹豈盪々天を衝くの巨幹を望まんや。然れども少くとも清新董の如くあるべし。吾曹豈信仰の鞏固、理想の深遠を以て責めんや。然れども少くとも文を舞はし辭を弄し雜然として文字を

驢列せしむるものならざらん事を欲せ。今や評隲の筆を採らんとして自ら願れば識淺く機微を察するの批評眼を有するにも非ず併も敢て陋々苦言を呈せんとするは竊に思ふ所ありて存すればなり。

花。廼。舍。吹。雪。氏。の。よ。し。草。例の如く筆路悠々たる擬古文を以て物せられたる漫録なり。自ら云ひ給ふ如く深く考へたるものにも非ず、をこざるふしも多からん。たがへりて見ん人はよしもあき行手の草とつみすて玉へやこのはしかき有れば命の儘に摘み捨つ可き。吾曹常に意へく君の筆流麗なりと雖徒に陳腐なる思想を反覆して冗長を極むるは大に憾とする所なり。冒頭の歌物語的の風流、ゆるいさものの想夫戀さては花はの條いづれも古しく。心くるいさものの折れたる鉛筆は流石に古人の云はぬ所なるべし。書は君の得意にも少し給ふもの、由かれは其論或は正鵠を得たるべしやと思ひきや。人物は筆者いうに巧ならんもわるしとは何を意味とるや、巧なるものあるからん筈はなき筈なり。南畫の平坂にして濃淡のきはだちて眼に映するなく諸の如き山、鑑範の如き水よりは吾は寧、四條派の墨筆一捺し去りて其間無限の情趣あり、墨色津潤より生々的なるを愛す。狩野派の圖取は様形の如しとは何によりて然る、光琳派、浮世派、其他或は然らん。要するに漫録の如きは句短くして意深く、自ら飘逸にして機警人を刺すか如くなるべし。何等の感想なく坦々叙し去りて些の波瀾なきや如きは能く其旨を得たりといふ可きや。潮花氏の野馬本苑に於ける新鉢詩中出色の作あるべし。時として藤村の時として晚翠の筆法を巧に操りて曠野を叙するあたり頗る流麗なり。曠野に野馬あり、踴れる胸は波をあげ、はけしき息は虹を

吐く、眼には望の光輝き、鬣は黄金の波とまりふ、或は驅けり或は跳り其勇躍は狀彷彿として眠にあり、叙事の妙を極む。唯憾む。嘶かは星を隠すべき聲を呑みて結末夕日を負うて、入るや霞の中に茫々として後を晦ませるよこま。寧ろ、夕暮の曠野、風は蕭々として千里に渡り、鳥影絶し、景物物凄き處、駿馬一嘶其聲遠く反響したらましかば、結末緊約、力ありからんや。答の音血の汐、朝夢の如き語の散在するはいと見苦る。要するに這般の長篇を物せられたる氏の詞才大に欽仰する所なり、更らに憤勵一番あぐんことを乞ふ。藤浪生抄譯の兵士の夢原詩の如く四句六聯の一篇、其勞は多とする所なれども句法冗漫にして散文に如し。三度まで樂しき夢を繰り返してり、れ如き詩としてゝゝはや。原詩は At the dead of the night a sweet vision I saw, And thrice ere the morning I dreamed it again. されど譯としてはさてやば。結末千鈞の力ある But sorrow returned. 云々悲愴の邊を時に東もあけそめて云々と譯し、猶耳底に残れる聲に聞ゆる様ある可憐望郷の情を淡々叙し去りたるいと、情なきわざなり。外國語を譯して原詩の面影を止むるは難き業なるも今一層。鍛鍊こそ望ましかれ。三諸先生の春興雜吟五首流石に洗鍊、琅々玉の如し、花咲かぬ、心ゆくいとれか、椿さく野の雨の夕いとゆかしけれと巨勢山の聯想は如何。吾曹は先生か歌壇に立ちて大方の春をよろに獨り高く持する雲雀の如く獨特の格調を物せらるゝと多とす。冀くは吾曹後進の爲時に瓊音を吝む勿れ。エスモの雷會的和歌は其調其文字は確に新しけれも五首とも確に失敗の作あり。されど其勇氣は頗る多とすべきなり。更らに潛心を望む。千木舎は冬れ聲よろし。花廼舍は詠花は見るへさもれあし。歌文會詠草中蟹丸の門曳入る、小車

の上とは何、人力車を玄關へと駆け付させる所へ抑糸垂るゝが、何の趣くある、殺風景も極まれり、富兄翁の馬や車の音すかり門の柳の糸は曳きけむ余りに纖巧に其調野卑、只正義氏の雨はれし花は壓卷あり、いこめでたし。歌壇には引くへて、勢汪盛なるは俳句あり。紫影先生は永き日の駱駝を始め光夢子の大津の蹺、文齋子の鶏の卵、無哉子の出代の脚絆の紐、愛花子の虎の眼にふき日永など及笹舟子の土筆咸陽宮など、其形小なるも趣味の津々たる遙に歌壇の冗漫に超ゆ。

本誌文苑中特に異色あるは頗奇觀あり、乞ふ諸氏益々勉めよ。更らに其小詩形れ中に潜むかく其緊約の筆、語法の巧妙を以て長篇を物せんは如何。村上函峯先生、朝に道を説きて衆生を導き、時に洪筆を採りて本誌をして九鼎の重をなさしむ。其句法振嚴吾曹襟を正うして心自ら端然たるを覺ゆ。明石華陵先生の東京紀念碑既に諸大家の評あり。吾曹何をう贅せん。菅君峯子、荒岳、鳩園諸子の作時に雄渾れ文字、絶好の句あるも余り上乘の作にはあらど。金井秋蹟先生の草色四首先生得意の作とかや、既に定評あり。吾曹豈徒に揣摩せんや。先生の詩由來眉宇高潔筆致の清絶を以て本誌詩壇中特に重鎮たり。更らに玉什を吝む勿れ。黒子軒、花月吟は艶麗を以て勝り漁父吟は飘逸を以て長とす。金澤八景誦す可し。犀河落厂、靈澤夜雨、高妙なり。龍山道人、香陽子の後を襲て獨り雄々稱を。益松、詠雲、仲春、遊山寺最も佳あり。特に益松に於て子れ面影を露出して理想れ高潔を見る。吾曹子に待つ所大なり。

今や長暇來らんとす。この間に於ける諸君の觀察する所詩趣の津々たるものあらん。冀くは誌上に見るを得んか。飯省の記可あり。高を窮めて夜半山巔に獨り山靈と語る妙あり。絃を打ちて海

上一痕の月を賞す亦可あり。要するに吾は眞摯なるもれを愛す。熱情あるもれを愛す。清新なるものを歓迎す。徒らに浮華にして彫蟲の枝に汲々として眞面目なふさるもれを厭ふなり。至囑至囑。妄評死罪 (亭々生)

批 評 欄

飛。栗屋主人が文苑擔任の編輯子へ當てられし者、筆路流暢にして少しも窘蹙の所なく、一々評隲し來りて其肯綮にあたり、主人が犀利敏銳ある眼識、容易に當る可らず、我は大体に於ては雙手を舉げて主人に味方する者あり、されど皮肉の極餘り詬罵嘲弄に過ぎたるは嫌あるは誠に惜む可き事とを、我は美を美とし醜を醜とする公平の眼は批評家の有すべき責任なることを知れども、或は過酷に失して言問題以外に走らんとを恐るゝのみならず、折角の投稿諸君が勇氣を沮喪して、爲に本誌の光彩を損せんとを憂へはなり、併し評者は評者の任あり、作者は作者の任あり、我投稿家諸君は決して批評の褒貶に依て其志を動すと無く、其所作を示し意存あはば何處までも其所信を吐露せられんと至囑

吹雪の君と花湖の君とれ高根の月は主人が二頁餘に亘りて論難せられしところ、我も本々高根の月には何事を綴られたる者。一向腑に落ちず、之を採録し給ふ編輯子余り寛大にてはあさやと疑ひ居りければ、如何にも二君の爲に辯護せん様もあし、唯二君が其儘に打過し給ふ筈に非らしと思へば、二君自ら御辯解を待つにあん、されど主人が人間から正確に禁錮の刑を免れずと存し候とは過言あるべく取消ありて然るべし、又月桂冠について少くとも百度位は辭書繰られしを

ふんとは失敬千萬と申すべきあり、歌欄に於て紫影先生が江に臨む、櫓の片枝紅葉してを陳套に失したりとし、三諸先生の理屈的を理屈的とし、富兄翁の陳腐あるを陳腐と断し給ひしは主人が公平にし憚らざる所頼も、然れども此點は往々誤解せられ易き者にして、或人は我師の作物を是非せんは恐ろしき罪なりと云へど、文學上の評論者には少く師弟の關係を離るゝは至當なるべし、何とあれば例令哲學に深遠かりとも、英獨語學に精通することも、獨り天賦の詩趣は、此等の人にも欠乏するにあれば也、

食栗屋主人の燈下漫評 筆致は前の文苑擔當の編輯子へ能く似たれば飛ッ栗屋主人と同一の評者ならんか、や、駄洒落に書き流されたるは、嘲弄かふぬ所も嘲弄の臭味あるやに覺ゆ、猶少しく莊重謹嚴なふんと望む、

雜 報 欄

雜報は通俗にして簡潔なるを旨とす、然るに本誌の雜報は他高校に比して甚だ絢爛に流れ、些少の事を澤山そうに無意義ある形容詞を連綴するを以て特徴とせしか、近來は稍其弊の脱したれども、猶厭味ある所多し、少々亂暴なる書振にても可なれば元氣の發揚を務められたし。

春、春草等は何故に雜報欄に入れられしや、殊に春草の如きは盛にヴァナスの大神、パン神ミューースの大神などを列べ立て、宛として五年前の文庫の一篇、穉氣笑ふ可し、推心録例に依て露濱郎の熱誠感謝せざる可らず、節酒會の廣告、會員殆んど全校の半と占む、借問を諸君近來酒量如何、

附録としての盡得春興六時間、這般の文字永く見へさりしは、我等が遺憾とせしところなりき、木寒坊が簡雅の筆や、緊り過る恨あれどうれし、其句は吐き捨ての儘と断られたれど中々に面白く、蛇穴を出で、義仲亡ひたり、三國の船并ひけり春の海等は優れたり、灰買の灰を、量て日永哉、陽炎や橋にしてゐる船の底、糸は木に繋て風の主あふずは坊が特徴を示し、神の面箱を出てけり、朧月は言ひ足らぬと思はる、僅々數時間散策にしての多くの句を得らる坊の俳想又豊富なる哉、唯恨む端無く坊等と橋守との間に起りし論争が坊をして小舞子の風勝を我等に紹介するを得せさしめしを、

拓川子の若松兎狩行、前者は詩人の遊とせば之れは壯士の遊なり、事既に壯文いかでの快かふざふん、豪放の氣筆端に迸りて勢脱兎の如し、されど六百れ健兒中行に従ふ者甘餘人に過ぎざりしと云ふに至りては、吓人事と天候とは果して憑む可かざるものかと慨せざるも無理あらず、擊劔大會記事、霞生君れ御煩勞を謝す

試業眼前に壓下して精讀の違なく、突差の間に筆を取りたれば誤見も多々あるべけれど、唯野人が近來批評れ出さるるを遺憾とせし愚衷を諒せられて、忘評の罪を許されんと切望に堪へざるあり、

雜 報

迎夏此辭

芳菲いつしの歌きて校庭一望青草滋し。落月古槐に低れて尾山城頭曉角哀み寮内未だ聞たるの時玻璃窓外、杜宇一聲空しく家郷の殘夢を破り、北隅の池塘疎葦薰風に戦くの所夜を徹して蛙聲雨の如し。あゝ一盤の覆盆子、一椀の新茗、以て新緑の窓に快談せんか。白薔薇郁々たるの處詩卷を繙きて清思を練らんか。遮莫、運動の好期剩す所少く霖雨將に來らんとして試問の日亦迫れり。それはた棍棒を振て熱球を飛さん哉。オールを握りて閑鷗の夢を破らん哉。

吾曹は夏を愛す。曉起一番、夢の如く籬邊を綴る牽牛花を愛せんが爲か、あらず。星未だ落ちず曉色蒼茫たる處荷花の幽香を樂しまんが爲か、あらず。清風簾を捲くの處藤牀を呼んで午睡を貪らんが爲か、あらず。七寸の草鞋に峻嶺を攀ぢんが爲に。艇を浮べて萬里吹さ來る海風に襟

懷をさらさんが爲に。

七旬の賜暇。山河は吾曹の蹂躪に委す。松風琴を奏つる荒岡に、殘壘廢墟の跡を尋ねて思を當年に走せ荆棘を破り叢莽を分け暮蟬靜ある處、苔を掃て古碑を讀む亦可なり。或は故舊を省一村老と語る亦以て優に詩囊を富すに足る。もしこれ電光閃めき奔雷轟き、急雨倏に來りて倏ち晴れ落照塔頭を移るの處虹霓懸り兒童手を打て、呼ぶ何等の爽快ぞや。由來夏日の景物豪壯にて、はた清新あり。諸子請ふ、颯爽たる青嵐を捲き來りて是を誌上に開展せよ。高岑に躋りて豪宕の氣を養ひ、オールを握りて稜々たる筋骨を練り、冲天の氣を藏り來りて之を校庭に發せよ。あゝ他日更らに登るの日刮目して諸子を見ん。臂を把りて快談するの日、冀くは諸子萬丈の氣概を聞くを得んか。

杜鵑啼血

蜀魂千年尙怨誰聲々啼血染花枝嗚呼赴々たる武夫は三尺の秋水に鬻りて斃れ儕々たる文士亦血を吐いて七寸け形管に伏す豈獨り嘈々咕々として月下の密雲を叫破する郭公のみならんや今や世は千紫萬紅の春色と落花の裡に葬り盡して校庭百步綠莎菁々として愈濃かふんとし兼六園裡霞が池は菖花は頻りに去來して夢香山麓杜宇初聞第一聲々々々々血滴を絞り來りて吾人の腦裡に印し麥浪潏潏として梅實漸く黄み落ちんとす我校半千の健兒何ぞ夫れ沈靜なる武夫劒戟に伏して夢痕を夏草に委す固より屑とする所文士血を吐いて管城子に斃る亦寧ろ榮譽とすべきのみ何ぞ徒らに胸々業々として半百の生を貪るを爲さんや

吊福井喜彦君

清瀧や波に散りこむ青松葉新樹蒼蔚として綠陰滴るが如く新竹參筍として翠影洗ふが如き中に

も常盤木れみ獨り落葉淅瀝の聲を絶たざるを奈何せん福井櫻園君の易簣は即ち是なり嗚呼哀哉君は是れ京都の人資性温良又能く無用を節す客歳我四高を去るに臨み篋底自積む所の黄白若干金を本校に寄附せりと儉も亦至れりと謂ふ可し君が本校に在るや専ら國文を研鑽し常に人に語て最早予が討究すべき餘地なしと言へりと予傲言一喝又以て君が抱懷を窺ふに足る既に大學に入るに及びて英文と專攻す爾來竊くに冀望を君が將來に繋ぐ焉か知らん一朝忽焉として二豎襲ひ來り東都紅塵萬丈の客房に天折し終ふんとは嗚呼芳魂遠く去て那れの邊にか吟ふ六々峯邊杜鵑血に啼いて古刹廢頽せる所がテームス河畔柳絮霏々として詩豪の英靈歎々たる邊の桂園の綠影が沙翁の墓畔が見上ぐれば天蓋壁き立ちて縹渺漠々見渡せば白雲向う伏して冉冉天矯桐花風無きに散りて人は則ち無し軫悼何ぞ堪へん嗚

呼哀哉

噫大津胖君

時は維れ明治戊戌六月朔犀川の南畔精舎櫛比一墳壘疊々たる所同窓大津胖君は瞥然として身を護身用刀の露と化しぬ豈酸鼻の極に非ずや君は元熊本縣士族にして今や移て浪華江頭に在り賦性沈剛にして而かも率直神經稍過敏にして又厭世的奇癖を有せり君が桑梓の地を辭して雲路茫茫笈を金城の澤畔に脱とるや烏兔匆匆既に四度の裘褐を更ふと雖ども四圍の物象一に君が宿志に背戻して颯軻蹉跎空しく年を追うて至る本來の剛直只管意を強うせんと欲すれども過敏に神經と厭世的偏僻とは忽ち君を驅て將來の事業宛ら雲影の如く煩悶懊惱の極已れ自ら身を永劫の闇黒に投て遂に白刃一閃の露と消えぬ雷嘆慟哭悵として誰う嗚咽せざらんや遮莫套衣を伸べ紉袴を穿ち巖然端坐胸腹を劈いて尙自ら喉頸を

貫き沓たる悲鳴だも發せずして倏忽として陰府に歸する所宛然蓋世の英傑が端然自若として自盡するの面影を忍ぶるものにして而るも是れ君を俟て始めて見る可きもの若し巧辨令色彼が如く優柔不斷之れ事として醉生夢死の間に一生を殞了し去ふんとする軟骨男兒をして君が眼前に出でしめば正に舌を嚼んで懸死を可きなり嗚呼狂風一掃芳蘭忽として夭折し奔雷一雨粟花怨を留めて地に在り人は靈鬼と化して遺愛の寶刀は空しく主なき机邊を守る人世の悲惨一に此に臻れるが犀川の流長へに盡さずして白嶽の雪は地と共に久し而かも坤圓球上再び君が聲咳に接するを得ざる得なり噫哀哉

青年歌文會を戒む

嗚々の聲を擧げてより末だ半歳ならざる今日早くも既に其一縷の命脈は絶ゆるに垂んとする青年歌文會の現時其の末路に近づきたるを思へば

吾人は豈慙然たらざらんとするも得んや

吾人は先に此會の成れるを聞くや單に所謂和歌のみに貢獻せむと志す者ならば其末路の將に期の如うらんを豫想したりき果せるかか聞く所にして信からは本會は委靡沈滯振はざる事甚だしく現に其第七例會(?)に如き出席者僅に某某二名に過ぎざりしと乎歌文會の諸士よ諸士が青年有爲の材を以てして猶三十一文字の羅列に思を勞らし徒に外形を粉飾して千年の昔に溯らんと給ふは全く徒勞の事に屬し霸氣滿滿たる青年のあんでう貫之定家の後塵を拜して隋喜の涙にくるゝ翁媪に類に倣ひ斯る道樂的隱居的の物に滿腔の精力を費さんや乎諸士は既に其當初にありて一步を誤りたりと云ふべし宜なり歌文會の過去の失敗に矜りし事や陳々腐々毫も見るべき詠なかりし歌文會は實に失敗の會をりき然りと雖既往は咎むべからず當に來るべき者に於て深

く猛省し明治の新思想を發瀉せるか然らずんば其名の示す如く文に就ても幾分の力を尽さるれば庶幾くは其生氣を復活するを得んる若し然らずして此儘に持續せんことあらば一敗地に塗れて復起の能はざるに至るや必せり乎諸士今にして顧るかくんば我青年歌文會を如何せむ

頑固者流を戒む

頑固者流を戒む
頑固者流、無趣味の徒の多き世の中や、さても縁なき衆生は度し難きと云ふ者乎

吾支那小説を讀む、彼等見て以て怪まざる也、源氏物語を讀む怪まざる也、沙翁の戯曲を讀む彼等怪まざる也、謡曲を讀む彼等怪まざる也、近松が院本を讀むに及んで彼等擧聲して曰く之れ君子學者の讀む可き所に非らずと

吾玉突を弄す彼等怪まざる也、棋を圍む、怪まざる也、謡曲を習ふ、怪まざる也、演劇を見るに及んで彼等喜ばずして曰く是れ小人婦女子

が歡樂の技のみこ

蓋し彼等は外國の者とし云へば之を有り難かる
あり、而して近松も沙翁も共に戯曲家の點に於
て何の異なる所無きを知らず、古代の者こそ一
へば高明なりと心得て演劇が彼のシンプルな
る猿樂等より遙に複雑にして美の眞髓に於て選
庭も雷ならざるを知らざる也、

吾等は今茲に戯曲論演劇論を擔つぎ出す者に非
ぶず、只吾等は今のアクトルが腐敗せるを見て、
彼等の演技を観るは君子の事に非ぶずと爲すの
沒理あるを信ず、又りゝる演技を観るは學者の
品性を損する者と爲すの悖理あると信ずる者也
由來渴者が飲するが如く知識を求むるを以て人
間の能事と爲すこと勿れ、命令的に道義を教ふ
ることも到底功なきあり、人類は感情の動物あり、
されば此等知育德育以外に情育の涵養も亦重の
ぶずとせんや、然れども吾等は演劇を以て卑野

なりとあし院本を以て淫靡かりとするの徒と共
に這般の事を語る可らざる也哀哉沒趣味の徒

西村茂樹翁の德育談

大日本弘道會長西村茂樹翁は四月二十一日午
後三時より特に本校學生の爲め講堂に於て一
場の德育談を試みられたり其要領左の如し

今回本校々長の委嘱により此に諸子の爲めに一
場の談話をなすを得るは老夫の光榮とする所奇
り諸子は今や學校にありて秩序ある規律と嚴肅
なる訓戒の下に就學せらるゝを以て學事上に就
きて敢て諸子に告ぐる要かし唯だ德育に關して
深く諸子に諭す處あらんとす近來最も驚く可き
は學校騒動の多きこと是れなり其原因は校長若
しくは教師に對する不平より起るものにして其
卑陋なるに至りては賄征伐の如きあり何れも多
少の理由なきにあらざるも其學校の体面を傷く
るのみならず却て生徒自身の名譽を傷くること

大なるにも拘はらず如何せん近來一の流行れ如
く一年に二三校は必らず此騒動の起るを見る諸
子に於ては無論斯る劣行なる可きを信ずるも
念の爲め一言諸子に告げ置くものあり

次ぎに老夫が多年講究せる道德に關し諸子の心
得となる可き要領を述べん抑も古今萬世に互り
て恪守すべきは智仁勇の三徳なり智を別ちて三
とす即ち學問、注意、遠慮これあり智愚は人の
天性なれども其幾分は學んで得るゝあり又た
注意は人の次くべうぶざる者にして注意より一
て種々の智を益す彼のワットる罐子の蓋の煮沸
によりて鳴動するを見て蒸氣力と發明せしか如
くニュートンか林檎の落つるを見て地球に引力
あるを知りしが如きは注意の致す處なり彼の罐
子の蓋や千萬年の昔しより煮沸の爲めに鳴動し
林檎も亦た古來地に落ちしものにて世人の飽く
まで知了せる所なるも其注意如何によりて智を

啓き遂に未曾有の大發明をなすに至れり遠慮は
遠き慮りにして未然を察するを云ふ彼の野中兼
山が江戸より土佐に歸るに際し一舟に蛤蜊を載
せ來りて忽ちに海中に投げ去り爾來今日に至る
まで年々歳々土州人をして蛤味を嘗めしむるが
如きは遠き慮りにして智なりといふ可し仁は之
を別ちて尊愛、信義、公德の三とあす尊愛は尊
王愛國にして一身一家を顧みんよりは寧ろ皇室
と國家を思ふの謂たり近來尊愛主義に反對ある
ものあれども這是邪説として排斥す可きなり二
人以上集まる時は互ひに信義を以てせざんば相
交るを得ず公德は私を去りて公に就くを云ふな
り、次に勇は勤儉、剛毅、忍耐に別つ可し勤勉、
節儉を敢行するには勇氣ある可いふ又剛毅
あくくば人生大業を成し難し忍耐に乏しければ
畢生の目的を貫徹せしむるを得ず此智仁勇の三
者より別るゝ學問、注意、遠慮、尊愛、信義、公

德、勤儉、剛毅、忍耐を一貫するに信を以てし、此老夫が多年講究して徳育の大本となす所以の者即ち之れに外ならず諸子の之れによりて世に立ち以て有用の人たらんこと切望の至りに堪へず云々

寸 鐵

○須く、丈夫の行動は、公明正大なるを要す曩に我辰章校長野縣中學の生徒と野球の技を競ふ勝敗元より時の數かり然りと雖も我校の學生の行動々もれば彼の公明正大に及ばざる有り吁北陸幼大學を以て自任する學生にして此點有るを見る誰の撫然たらざるを得んや

○青年に活氣なしとは世人の常に口にす所而も一人の立つて此弊風を將倒の機に挽回する者無さか白袴五紋羽織に外容を飾り獨り得々として街上を練り歩む一連を見る毎に吾曹胸中一片の涙無き能はず

○血と涙有る者世以て狂となす狡才駄辯を弄する者世以て才子と稱し吁狂人か吁才子の嗚呼天の嗚呼地の

○昔の書生は廉恥を知り今の學生はマークを知る廉恥とマークの差は即ち昔今の依て分る所なり昔を知る者は今を知らずマークを知る者は恥を知らず

○法愈々密にして罪益々猾に走る法を行はんとする者須く三省して可なり

○世には名美にして實之に伴はざる物多し人我れに近く其例を示せと乞はば余は躊躇なく答へんとす節酒會其物の如しと

○俚諺に曰ふ藪をツ、いて蛇を出すこと小事にのみ齷齪として此れ之れを事とし以て大事れ務むべきを忘る禍至らざれば此れ眞に僥倖(以上Y生)

○心に揣摩臆測を逞ふし以て其民の過失を求め

んと若し疑はしき有れば直ちに以て罪と断定すかゝる治世の下に有る民は其れ薄氷に乗りて千里を渡るが如きや

○我は活辭書に非ずと喝破せしは山陽也數萬の載籍座邊に存す何を苦しんで然るを學ばんや眼孔豆の如き者好んで人を活辭書たらしめんとぞ咄

○手に牙籌を執り口に學理を説く心已に利に奔りて又師弟の情誼を辨へず褒貶規なく一に私意に従ふ猶以て學者として尊信すべきか奇! 怪!

(ノへ生)

○我自ら捨てんか寧ろ捨てられんか案山子の威を振ふ奴原をして上に立たしむ下戰々たる小鳥の勞に苦しむも亦憐れならずや秋夜月は清く金風颯々として樹梢に聲ある時偏頗に満ちたる全世界を火とせむ哉

○下にある者は正義も賞せられず上に立つ者は

不徳も罰せられず物質的にのみ走れる濁世には祈らずとも守るべき神も其威徳を施すに由なきの吁(畝々子)

○朝に金殿玉樓に居て破邪顯正を説きし堂々たる天下の大官吏が夕に蓬窓茅屋に潜て悖徳醜行を敢てす彼可取而代也の公々然にあらざして陰々の裡に逞うす咄々何等の怪事ぞ(北星生)

○青年壯心勃勃拔山蓋世の壯言は小人を驚らしむるも智者をして笑はしめ青年俗事に區々として小心翼々たれば亦懦夫を去る事遠からず何ぞ夫れ青年は志を大にして其の行を謹まざる噫々兩端に逸して其の中庸を得ざれば上下共に不可

(吞海)



編輯子嘗て日本弘道叢記第八十五號を讀む中に誠意談と題し新妻融なる人諄々飯酒に就て數千言を費す蓋し吾人を裨せる事尠少からざるらんか轉じて爰に載するは編輯子は老婆心の

第二十二章 明 飲酒相

貧究困乏不能復得、辜較縱奪放恣遊散、串數唐得用自賑給、耽酒嗜美飲食無度、肆心蕩逸魯扈抵突、不識人情強欲抑制、

飽飲昏醉して敢て産業を營ます、是を以て貧窮日々に逼り、復た得る所なきなり、古云通宵出飲清朝臥此是人家百弊生、後漢書曰辜較百性與盜無異、辜は障あり、他人の買賣を障へ、而して自ら其利を取る、唐得は數々人を誑かすの計を習ふて横に他財を貪ぼり、以て己れが生計とあり、不義にして財を得るな

り、無度とは旨酒好色に沈面し、美食に安飽し、其節量なきなり、一夕の宴會に萬錢を費やし、夜々に燭を秉て飲み、高志放情として天地を衾褥とし、處世を大夢として、醉中醉を添へ、飽後に飽を重ね、偃塞耐睡して、其度量を知らず、噫々此の如きの人は、世れ中の蠹盡ならずや、古詩あり、祗定線行嬌婦淚、飯香玉粒老農脂、

然るに今十脂水に沾さず百事懷に關せず、坐ながら受け飽くまで食ひ、心を恣まゝにして度ありらば、銅洋の責め鐵丸の苦、豈に遠くとせんや、若し人沈醉とれば其心悅忽愚魯にして、其氣は高舉縱橫あると、喻へば鬪牛の角を以て抵觸し、又狂犬の坑中より突出するが如し、前後を弁へず、水火を避けず、物を拒み事に觸れて、縱橫狼藉傍觀の譏笑を顧みず、人情の差異を辨へず、強て抑へて人を制

せるあり、夫れ酒は酒其者が自ら過失を生ずるに非らず、人之を飲み種々の罪過を生ずるあり、故に過失は人に約して名つけて狂藥と云ふ、酒は心を喪ひ徳を失ひ、士は其名を敗り、官は其職を廢し、農は其疇を荒し、賈は其貨を損し、少壯は其身を過する、甚だしきは肺を爛らかし、腸を腐らし、之れに因りて疾を招き生命を失ふ、小にして一家を敗り、大にしては凶國の端とされり、豈に畏れざる可けんや、禁酒會の主意書に云ふ、酒の害あると甚だし、疾病之が爲めに發り、子孫之が爲めに弱く、貧困之が爲めに來り、牢獄之が爲めに廣し、一國の元氣を消耗し、社會の節義を衰弱ならしむ、云々、古云置之辨中酒也、酌三干杯注於觴善惡辜怒岐矣禍福得失無岐矣、一言以蔽之、曰禍泉而已、又云酒入吾出、吾出德損德損不如損酒也、古詩ニ

養性勿貪番性水、成家宜戒破家湯、怕君不信觀前古、桀紂會將敗夏商、禮記に一獻の禮に、賢主百拜すと云へるも、終日酒を飲で酔ふことを得ず、以て酒の禍を防ぐあり、噫々嗜み飲んで神亂れ、膽大に心狂し、遂に形骸顛倒、禮法錯亂一身の事業を廢して成りせず、父母眷屬をして飢に泣き、寒に苦らしむ、噫々進では目下に貧窮し、退では將來に沈淪す、實に二世不得の過失あり、曲亭翁曰く嗜欲を捨つる者は、百年の壽命を拾ひ、飲食を省く者は却つて半生の氣力を肥す、人として欲なき者はあらず、若し萬づの欲を一つに寄せ、惜い欲いの一とらうけにし、命の惜い云ふを忘れずば、是に増す養生はなし、人の養生は嗜欲を省くに在り、世に酒を飲んで酔はざる者あり、然れども未だ劉玄石が如きはあらず、酔ふて亦醒めざる者は

なし、然れども未だ屈原が如きを見ず、夫れ
 中山の美酒千日、玄石を酔はしめて、玄石を
 殺さず、楚國の濁酒一旦屈原を醒して、屈原
 を殺せり、是故に一人先づ醒めんより衆人の
 酔はざるに如かず、酔はずして醒みんことは、
 愈々難かる可し、酔ふて川へ墮つるはあり、
 醒めて淵へ沈むはあし、是を以て屈原が如き
 は稀なり」と、世の玄石たるもの豈に鑑みざる
 可けんや、

附 録

春季弓術大會

春季弓術大會は去五月廿一日無聲堂射場にて舉
 行せられぬ、我よ見事黒星射突き、中原の鹿
 携へ歸りて晚餐の下物にせんと、自分免許の天
 狗連は鞍馬山の大僧正より鼻を高くし、八時頃

より詰のけたり、午前は例の通常射的、思構へ
 的の外れて今更鼻の所置に困るか多き中に、武
 德會にて見事金的射落して居並ぶ百五十人餘の
 斯道の達人を驚かしたる楠先生は、十手にて一
 度は皆中し一度は十八本迄中てくれには、流
 石は先生、日本一よと叫ぶぬ者は無のりけり、
 はや數番の射的終りし頃一人の射手弓引絞り、
 切て放ては誤たず、黒星の眞唯中を射たるご同
 時に、天地に轟く霹靂一聲、流石の射手も弓取
 落し、茫然として打見やれば、今しも城内より
 打出したる午砲ありしに、一坐咲笑暫は鳴りも
 止まざりける

午後は正式の競射なれば、弓矢八幡に祈誓を懸
 け、狙は正しく來れりと切て放つ矢は前後上下
 に外れ、日頃の剛者大方は不覺を取りぬ、唯獨
 り柏原氏のみは殆獨歩の有様にて、名譽の桂冠
 三つ迄戴き吐き出す氣餘は麗かなる 天氣をも曇

ふせぬ、受賞者を擧ぐれば左の如し

楠 正 可

尺 二 的 十 手

其外に市内老練家と職員諸氏混トて數番に競射
 の結果賞を受けられしは左に諸氏なり

- | | | | |
|-----------|-----------|-----------|-----------|
| 第一等 柏原 省私 | 第二等 二木 重吉 | 第一等 奥村 榮滋 | 第二等 横山 隆俊 |
| 第三等 稻垣 米門 | 第四等 鈴木 清藏 | 第三等 宮川 爲三 | 第四等 久 田 督 |
| 第五等 小倉 彦六 | 第六等 二宮 英雄 | 第五等 前田 孝英 | 第六等 楠 正 路 |
| 第七等 加藤範次郎 | 第八等 高澤辰之助 | 第七等 生駒 義直 | 第八等 上田 尙久 |
| 第九等 古川 義天 | 第十等 永田 茂穂 | 第九等 寺田 將司 | 第十等 中條 鉄男 |
- 尺五的點取競射
- | | |
|-----------|-----------|
| 第一等 柏原 省私 | 第二等 山本亥太郎 |
| 第三等 高澤辰之助 | 第四等 二木 重吉 |
| 第五等 中島 擴三 | 第六等 田宮 春策 |
| 第七等 小倉 彦六 | 第八等 加藤範次郎 |
| 第九等 古川 義天 | 第十等 近郷 重孝 |

湊安宅海濱演習記事

一週の休暇、或者は故山に歸りて父母の膝下に
 省み、或者は健脚八洲の山川を跋涉し、英氣鬱
 勃校に歸るや、壯快ある春季發火演習の行はる

は毎年の例とる處、然るに本年は不幸端艇競漕會に先んぜられ、又舊藩祖高德公の三百年祭に妨げられ、荏苒遅延、空しく萬花妍を競ひ煙霞野を置むる好期を逸したり、流言あり、本年は行軍を行はざるべしと、鷄林八道を蹂躪すべかりし薩摩隼人の意氣は、征韓の議行はれざりし爲め、遂に破裂して西南戦争となりぬ、流言若し真かりむら、滿校七百の意氣抑も孰れに向て破裂せんや未だ知るべからざるなり、吾人は當局者能く之を知るを信し、腕を撫して期の至るを待ち居たりき、

行軍演習幹部

- 大隊長 磯田正謙
- 同副官 荒木三郎
- 同旗手 佐々木菊若
- 同衛生部助手 大塚正一
- 同 千葉玄也
- 同 望月慶作
- 同 新谷新吉
- 同 太田正一
- 同 高松多齋
- 同 大西潤二
- 同 内山忠次郎
- 同 瀨口廣海
- 同 古川義天
- 同 福見常太郎
- 同 深見貞之助
- 同 河野勇
- 同 橋本喜久三
- 同 駒井定哉

果然五月四日に至り、來る九日一泊の豫定を以て美川地方に發火演習を行ふとの揭示は、待ちに待ちたる健兒の沸くが如き歡聲を以て迎へられぬ、

第一中隊長

- 第一小隊長 深見貞之助
- 第二小隊長 河野勇
- 第三小隊長 橋本喜久三

八日 午後部隊の編制を爲し、醫學部全体を第一中隊、大學豫科第三年を第二中隊、第二年を

- 第一小隊長 深見貞之助
- 第二小隊長 河野勇
- 第三小隊長 橋本喜久三
- 駒井定哉

第二中隊長

- 第一小隊長 湯本四郎右衛門
- 第二小隊長 富野佳照
- 第三小隊長 岩澤清

第三中隊長

- 第一小隊長 田中秀知
- 第二小隊長 二上兵治
- 第三小隊長 佐々木久二

日下庄太郎

- 村田讓
- 湯本四郎右衛門
- 富野佳照
- 岩澤清
- 米澤啓
- 森澤惣太郎
- 辻村耕夫
- 増田貞吉
- 竹下麗三郎
- 吉田懋誠
- 河内監次郎

- 第一小隊長 田中秀知
- 第二小隊長 二上兵治
- 第三小隊長 佐々木久二

第二中隊長

- 第一小隊長 高賀陽然良
- 第二小隊長 杉浦茂
- 第三小隊長 栗田貞三

第四中隊長

- 第一小隊長 茂木佐次郎
- 第二小隊長 宮村隆治
- 第三小隊長 松井萬綠

附 録

第二分隊長 林慶太郎
 第三分隊長 柳澤誠一郎
 第二小隊長 吉田伊三郎
 第一分隊長 森 卷 吉
 第二分隊長 山本他家松
 第三分隊長 桑原 郁三
 第三小隊長 西野忠次郎
 第一分隊長 中村 金男
 第二分隊長 藤田 敏彦
 第三分隊長 有馬章三郎
 翼准士官 二宮 英雄
 曹 長 篠 原 巖
 給養曹 舟木重次郎

行軍演習役員

統 監 部

統 監

統監部員 統監付

同 北條 校長
 同 谷井 教授
 同 大島 教授
 同 上田 教授
 同 中野 教授
 同 村田 助教授

林慶太郎
 柳澤誠一郎
 吉田伊三郎
 森 卷 吉
 山本他家松
 桑原 郁三
 西野忠次郎
 中村 金男
 藤田 敏彦
 有馬章三郎
 二宮 英雄
 篠 原 巖
 舟木重次郎

北條 校長

谷井 教授

大島 教授

上田 教授

中野 教授

村田 助教授

書 記

大隊本部

大隊長

設營部員

同

會計部員

同

衛生部員

中隊本部

中隊長

同

同

出張員

宮地書記

磯田教授

長屋教授

松田菊治

田中助教授

山瀬時吉

岡田剛吉

福見助教授

日下助教授

宮川助教授

茂木教員

櫻井教授

浦井教授

野田教授

ハピランド氏

河合 教授
 市村 教授
 入江 教授
 中俣 教授
 宮川 教授
 金子 教授
 村上 教授
 杉森 教授
 高山 教授
 末近 助教授
 堀助 教授
 武笠 教員
 赤尾 副手
 大瀬 副手
 宮澤 副手
 河島 副手
 由良 賢次郎

大隊の編制終り部署定まるや、嚙亮たる喇叭の吹奏に伴ひ、校内練兵場に於て分列式を行ふ、一旋の校旗翻々として輕風に颯り、劔芒綠樹に映じ鳥雀囀を止めぬ、我校の分列式を行ふは今回を以て始とす

九日 天已に明けて東天微紅を帯ぶるも、陰雲大空を鎖して將に雨降らんとす、五時前より校庭に馳せ集る健兒、喜色満面に溢れ相顧て意氣昂然たり、喇叭一聲静寂ある曉氣を破りて響くや昨日定めたる部伍に從て整列し、武裝檢査を受け、磯田大隊長の號令の下、半千の貔貅歩武肅々校門を出づ、時正に六時四十分あり、曉風戎衣を打つて神氣爽快、路傍の市人聲を呑んで目送するのみ、七時二十分停車場に着し、少時休憩して直に構内に入る、號令一度全軍に傳はれば五百の大軍瞬時にして車中に在り、其神速な

る、平日喧騒雑沓に慣れたる係員をして茫然自
失せしめぬ、汽笛一聲停車場を離るゝや、雲雀
麥龍を出で、高く雲に入り、老蝶残んの菜花に
眠りて陽春の夢を追想せるか如し、遠く眼を放

りて將に震天撼地の大活劇の演ぜらるゝを知ら
ざるものゝ如し、十時三十分に至り各隊整列し、
彈藥を配布せられ、磯田大隊長儼然劍を按つて
演習の目的及命令等を與へらる、

第一 目的

てば、鞍ヶ嶽一帶の連山は雲烟模糊の間に隱見
し、村祠の新樹翠將に滴らんこと、初夏郊外の
景物悉く無限の詩趣あり、青衫筆を抛ては是れ

敵前に於ける大隊の背進法、大隊の展開法、及
騎兵砲兵使用の一部を行はんとす

第二 命令

武夫、英雄首を回せば是れ神仙、身は命を奉
て敵に向ふ武夫なりと雖も、一片の雅懷焉ぞ
梅花を挾んで敵軍に入りたる古武士に譲らむや
、八時二十分美川驛に着し、下車して停車場を
去る丁餘の徳性寺前に至りて停る、乃ち第三中
隊を残りて北軍たらしめ、餘の三個中隊は更に
進んで、恰も九時手取川下流の假橋を渡り、左
岸砂山の背後に着し、又銃して休息し、次で晝
食を行ふ、一望渺々たる日本海は陰雲に壓せら
れて波無く、波碧に砂白き邊水鳥太平の夢を貪

一敵は美川附近に在り、當大隊は當面の敵を
防ぎつゝ、安宅方位に向ひ背進せんとす
二第四中隊の一小隊は前衛となり湊村より安
宅に通ずる道路上福島村中釜屋村を経て安
宅村に向ひ行進すべし
三第一中隊を以て後衛に任し、殘餘を以て本
隊とす
四予は本隊の後尾にあり

第三 注意

一敵は帽に日覆を附す

りて安宅の方向に退却したり、我隊は之を追
躡す

一假設旗を使用するときは赤色旗一本を以て

當中隊直に警戒行軍に移る、第一小隊は尖兵

歩兵一中隊とし、紅白旗一本を以て歩兵一

とされ

小隊とし、緑白色旗一本を以て騎兵一中隊

とし、黄色旗一本を以て砲兵一中隊とす

其他記號注意等を與へ終るや直に進軍を始め、

一記號は便宜上前例の者を用ひ云々

十時四十分手取橋畔に達す、斥候歸り報じて曰

一毎正時に於て十分間の休憩を行ふ

く、敵は對岸砂山の後に在りて我軍を待つもの

一運動開始は午前十一時とす

ゝ如しと、田中小隊長直に進んで敵狀を窺ふに

斯くして南軍の準備全く整ひ、敵今や來ると待
受け居たり、

果して斥候の報の如し、謂へらく、橋を撤して
我軍を防かば、困難蓋し小少に非ざるべし、然

先是北軍となりし第三中隊は直に彈藥の配布を
終り、晝食を行ひ休息す、數株の古松參差たる
裏巍乎たる堂宇半空を摩し、鈴聲唳々轉だ塵寰
を脱せしむ、佛前に躊躇するあり、樹下に仙夢
を結ぶあり、十時十五分に至りて全軍集合し、
宮川中隊長勵聲戰鬥方略を示さる

るに敵の計茲に出でず、強を示して我軍を脅か
さんとするの意り、將又我軍を誘ひ一舉に鏖殺
せんとするの意の、遮莫、是れ實に乘すべきの
好機かり、對岸の敵兵を撃退し橋を占領するは
目下の急務ありと、顧みて令せば一隊の兵は直
に堤防に沿ふて散開し、狙ひ定めたる銃先は對
岸の敵に向けられぬ

敵は略一時間前當美川町を過ぎ、手取川を渡

砂山の後に控へ居たる南軍の前鋒は白軍の斥候
對岸に出沒するを見るや直に退却を始め、殿軍
たる第一中隊は第一小隊をして直に散開せしめ
ぬ、兩軍今や大河を挾んで對陣す、刻一刻機は
熟し來れり、硝煙は猛然として堤防より迸り出
ぬ、南軍亦何ぞ躊躇すべき、爆然火蓋を切つて
應戦を始めぬ、見る／＼硝煙は天に漲り、殷々
たる砲聲遠く北海に轟き、河泊怒號して天地晦
冥となれり、對戦十數分、本隊は既に濱街道を
釜谷村に向つて退き、最早敵軍を遮ぎるの必要
無きを以て悠然として引上げ、激戦中左翼に延
伸増加せし第二小隊を合せ、本隊を逐ふて退却
を始めぬ、尙殿戦に備へんう爲め第一小隊は散
兵の儘にて退却せしも、北軍容易に渡橋する摸
樣おきを見、唯斥候のみを残し後方を警戒せし
めたり、前衛は少しく方向を誤り、左方本街道
上の村落に入りしも、直に相合し、青松白沙の
海濱に沿ふて徐々退却し、午後二時安宅の濱に
達す、此間後方の斥候時々北軍の斥候と衝突せ
しのみ
北軍は敵の本隊砂塵を揚げて退き、散兵も亦續
て引上げたるを見て、先づ斥候を派して砂丘を
搜索せしむるに、南軍既に悉く去つて隻影を止
めず、依て直に渡橋を終へ、第二小隊と前鋒と
して本道を湊村より福島村に進み、右折して麥
隴の間を行く、先頭の斥候時々敵の後衛を發見
するにも拘らず、敢て肉迫追躡せず、空しく好
機を逸せしむるふと數回に及び、部下皆中隊長
の意の在る所を計る能はず、兵氣大に沮喪し、
魏狄動もすれば疲勞の色あり、二時四十分漸く
安宅附近の松林に達す、斥候報を齎して曰く、
敵は海濱に約一小隊を散開せしめ我追躡を遮ら
んとするもの、如しと、無事に苦みたる全軍は
此報を得て蹶然奮起れり、正に是れ睡より覺め

た猛虎、一聲高く吼おば北海爲に奔騰せん、散
れれ號令下るや、第二小隊は早く既に松林を離
れて砂上に在り

白刃を踏み礮丸を犯し、奮戦激闘敵壘を占領す
るあと、難は則難ありと雖も苟も勇力ある軍隊
の爲し易き處、獨り戦はずして敵を後にし、旗
鼓堂々退却するに至ては難中の至難なり、而も
南軍は之を果せり、敵能く何程の事う爲さむ、
一舉我軍の威武を示さずんば恥辱そも何の日に
う雪くを得んや、將卒共に腕鳴て鬱勃たる英氣
今や將に破裂せんとす、恰好し本軍(假想)より敵
を遮るべしとの命を受けたり、飛報一たび傳つ
て活氣全軍に起れり、福見中隊長は大隊長の命
を受けて直に第二小隊を散開せしむ、北軍の顯
るゝに先づ十數分、兩軍共に血に渴いたる壯士、
正に千ヤードを隔て、相對す

二時四十分北軍の斥候林間に出沒するを見るや

火光一閃戦は南軍の散兵によりて始められぬ、
敵亦應砲を發し、兩々交々兵を増し火力益々盛
なり、朝來の曇天暗膽として海波爲に黒く、白

沙一帶北濱に連る處硝煙は砂塵に混じ、激浪嚴
礁を撃て遠く聲あり、唯見る北軍の背後黃旗翻
々海風に颯るを、之なん敵の砲兵なり、榴彈我
散兵線に近く破裂して餘片甚しく兵を傷ふ、乃
ち第一小隊を右翼に増し、少しく退却して防戦
五分時、北軍亦兵力を右方に増し奮進し來り、
彼我の距離約四百ヤードに迫る、我砲兵は後方
村落の陣地より盛に敵の散兵を砲撃す、敵更に
假設の二箇中隊を増し益々進撃し來る、時や宜
し第三中隊をして密集の儘に丘上より一齊射撃
を行はしめ、又騎兵を放つ、鉄馬風に嘶いて轟
然敵の右翼を突く、敵は愈々奮迅狂奔し勝敗を
一舉に決せんとするもの、如し、第二中隊は伍
間に増加せられぬ、暴虎馮河の北軍は今や二百

ヤード内に迫り、機熟せりこや思ひけむ、着劍疾驅突撃に移れり、此時に所する唯逆襲あるのみ、最後の援隊たる第四中隊をも合し、總軍一齊大逆撃を行ふ、黄埃濛々人馬を没して咫尺を辨ぜず、喊聲乾坤を震動して海波翻蕩する少時時恰も喇聲休戦を報下、天地静寂に歸し、斷雲太陽を洩して劍鏗燦爛たり、時に三時半あり、休憩四時に至り大隊長兩軍を集めて講評を述べらる

本日の演習は豫め説明せし如く大隊の背進、展開及砲兵騎兵用法の一部を示す考ありき、尤も之は我學校に於ては始ての演習なり、今少く講評を下さむ

一 湊村を出て此地に達する背進中、前衛は方向を誤り、甚しき迂路を取りたり、爲に他隊は大に不便を感じたり、甚だ宜しからず
一本隊の動作に勇氣無し、尤も背進は甚だ困難

なるものにて、敵の追撃を受くる場合は特に然り、併し本日は初歩の演習として敵の追撃を受けざる筈なりしを以て背進中には最容易あるものあり、然るに毫も勇氣無く、此地に達する迄の動作は一も賞とべきもの無し

一 此地に達する途中、當大隊は本道は本軍より安宅附近にて敵を防守すべしとの命を受けしものとの想定を懷き、直に其所置を爲したり即ち先づ後衛中隊を散開せしめ、第三の假設中隊を増加し、第二中隊を以て援護射撃を爲さしめ、後第四中隊として代らしめ、第二中隊は左翼に延伸増加を爲さしめたり、敵は續々前進し來りてを以て第四中隊をも密集の儘増加せしめ、最後に逆襲を行ひたり、

一 騎兵には敵の右翼を突き散兵線を蹂躪し左翼に廻りて歸るべき命を與へたり、之に對し敵の動作宜し、併し實際の騎兵なれば如何とモ

一 謂び難む其の概を述べて今日迄の演習を評す一 砲兵陣地は本隊の後方に置きしも、諸則を略せし一般の形式を示せしのみなり
一 演習を行ひしなり
一 講評終つて各中隊長は各其部下に注意を所お
一 演習四時半安宅を發し小松に向ふ、三軍意氣揚
一 凱歌を奏し、威武堂々小松町に入り、五時半
一 大隊本部前に着し、各隊其營舎に就く、
一 十時 征夢半にして起床の喇叭に破られ、起て
一 肩を排すれば昨日來の曇天全く晴れざるも、
一 自由連系の朝霧を破つて曙光既に滿天に漲る、
一 此日の假設隊とありし第二中隊は、日下中隊長
一 率ゐず六時出發す、江ノ島村に小憩して八
一 時半湊村に入る、直に彈藥を配布し更に戦線に
一 向せ進む、至れば則前日北軍の渡橋を遮りたる
一 手取橋畔の砂丘なり、青松白砂依然舊の如く、

枯草茫々轉だ昨夢を忍ばしむ、日下中隊長音吐
明晰命令を下して曰く

一 當中隊は某大隊の一枝隊にして尙之に假設の一箇中隊を屬せらる
一 安宅附近の敵は既に前進を始むこの情報を得
一 一枝隊は右方の高地と前面れ或地を占領して之を防禦せんことす

一 第一小隊より一分隊(戰鬥斥候)を出して敵の前進を監視すべし、而して敵來らば數回射撃をなし以て海濱に誘致し速に其小隊に歸來すべし

一 一他の部隊方は後の高地に至り後命を待つべしと、命終るや第一小隊第一分隊は遙に海岸に出で、散開し、其他れ隊も皆持場を固め、敵今や來ると堅唾を呑んで待構へたり、右に汪々たる北海を控へ、後には手取の激流滔々として海に朝す、准陰公の故智に倣へるにあらずと雖ども

兵死地に在りて勇氣平日に倍す、敏捷を以て聞へたる驍將精銳の兵を率ひて要所を扼す、何の敵か能く之を破ぶるを得ん(北軍)

南軍は午前七時、第一第三第四の三中隊は大隊本部前に集合し、磯田大隊長の指揮の下に元戈肅々小松を發す、朝敵東山を離れ朝霧搖曳滿野を罩む、蛭川村に於て小憩し更に進む、路田圃に間に入り小徑並び進むを得ず、乃ち一列となる、青々たる麥浪の中一大黒蛇蜿蜒海岸に向ふ、前頭既に濁江に達し後尾未だ蛭川村を出でず、福島より左折し、九時半釜屋村附近の松林に達す、暫時の休憩を許さる、木立繁くして日光を透さざる處辨當を開き、三々五々相集りて談笑時を移す、十時四十分に至り整列し彈藥の配附を受く、次で大隊長は左の告諭を與へらる

目 的

一目的は昨日の通り而て今日は攻撃法を行はん

とす

命 令

一情報に依れば敵の一支隊(約二中隊)は湊村附近に在りて我前進を防止せんとするもの、如し當大隊は之を攻撃せんとす

二第四中隊は前衛に任ず吉原釜屋村を経て湊村に向ひ行進すべし

三第一第二(假設旗)第三中隊を本隊とす

四予は本隊の先頭に在りて行進す

注 意

一敵は帽に日覆を附す

二記號及假設旗に關しては昨日の通り

終て直に出發す、前鋒となりし第四中隊は第二小隊を尖兵とし、前方を搜索せしめつゝ吉原釜屋村を経て前進す、十一時四十分斥候敵の情勢を報つて曰く、凡そ一分隊の敵兵湊村後の海濱砂丘の上に在り我隊の前進を望見せるもの、如

しと、距離未だ遠きを以て、警備を嚴にし深く松林中に隠れて進む、(南軍)

大軍杖を銜て深林を進み、一步は一步より敵に近く、禽鳥亂れ飛で急を告げ、黒龍海に躍り騰天の勢を示す、敵我を見顯しけむ、霹靂一聲、戦闘は海岸の散兵によりて挑まれぬ、我軍直に尖兵を散開せしめ應砲を發せしむ、時正に午、砲を蹴て前進する我隊を妨げむして敵兵約一小隊前方高地に顯れ出で盛に一齊射撃を行ふ、我軍乃ち第一小隊を右翼に、第三小隊を左翼に散開せしめ更に進む、平坦々たる砂濱地物の利用すべきもの一も有るなりと雖も、彈丸頭上を掠めて貔貅氣益々奮ふ、敵は假設の一中隊を左翼に増加し大勢侮り難し、忽ち敵騎問道より壽至し我右翼を衝く、先に大隊長の注意によりて形勝の地を占め居たる右翼は瞰下之を撃ち、敵騎遂に進む能はず、此時大隊長馬を戦線に進め親

ら敵勢と地形を計り、神算既に胸中に決す、乃ち本隊ある第三中隊の一小隊を右翼に増し、殘二箇小隊を左翼に延し一齊に前進す、敵亦力を兩翼に増し防戦最も勉む、彼我の距離約四百ヤードに迫り、轟々たる砲聲北海に響きて濤瀾洶湧し、塵烟溟々天日を掩ふ、全軍血沸き肉躍り蓋頭碎けて鮮血白沙を染むるも顧みる者無く、肉飛び腥風砂を捲くも誰か屈する者有らむ、壯士軍に望む進むと死とのみ、背水の陣を布きたる敵も勢茲に窮せしか、發火甚だ稀にして唯殊死高地を固守せるのみ、時や宜し、今にして一舉敵陣を突うずんば勝敗夫れ何れ日の決せん、最後の援隊伍間に増加せられ、躍進の號令全軍に徹す、將士踊躍して驟進は忽ち疾走とあり、突撃の令下るや鯨波怒號天地に震ひ、風濤相逐つて濁浪澎湃天に接を、敵焉ぞ陣地を守るを得ん、隊形見るく崩れて周章狼狽山後に顛落し

大馬相踏籍し殺傷無算、何事ぞ左方の一隊尙小
臣に據りて抵抗を試みんとぞ、餘勇更に奮ふて
喊聲再び乾坤を掀動し、敵は刃を交へずして紛
亂を極め、奔流に沈溺して死するもの數を知ら
ず、既にして喇叭中軍より響きて休戦を報ず、
時に零時五十分、兩軍砂上に集合し休憩す、戰
雲全く收りて天空一碧に、煙波瀾漫極無く白帆
輕風を孕んで舟甚緩に動く、兩軍の壯士固より
同窓の人、劍鏗鞘に入れば友情油然として起り
相擁して戦況を談じ和氣洋洋たり、一時四十分
に至り磯田大隊長は全軍を整列せしめ、劍を按
ずて小丘上に立ち講評を述べらる曰く
云豫め告し如く本日は大隊の攻撃法を行ふ考に
至て前衛を以て前進し來り、敵を發見するに及
びて大隊長は地形を偵察して大隊の配備を爲
せしめたり、平日學課にて教えし事を實地にて示
せしに過ぎず、此地形を見るに海岸の平地を

進むは最困難なり、特に敵は可なりの陣地に
配備し居たり、而て最も攻撃に便なるは右方
松林中の高地ありとす、然れども地域狹少に
して固より大隊の戦面を有せず、故に實際は
殆んど平方に配布したり、是れ重きを地形に
置かざらし爲なり
一敵線に突撃する際には、小林中に假設の一中
隊と一箇中隊、濱地には一箇中隊半を配し、
他は密集の儘にて應援せしめ、敵面全体に突
撃したり、但實戦の場合には負傷等の爲め戦
線は著しく短くなるものなり
一前衛の進行散開等に付ては別に云ふべきこと
無し、其他各中隊の動作に付ては中隊長より
説明を與ふべし
一突撃の際敵の一部尙左方に在るにも拘らず突
撃を中止せしは宜しからず、如何なる場合に
も仆れざる限は、全く敵陣を占領する迄突撃

すべし

と、講評終りて徐々歸途に就く、美川停車場前
に着し休憩するものと一時間餘、四時全軍悉く乗
車し終るや、忽ち長蛇黒煙を吐て進行を始めぬ
滿野の風光意ありて凱旋を祝するが如く、將士
意昂りて氣鋭天を衝く、金城の地に入りて步調
整然、一系散せず、一毫亂れず、五時二十分校
門に入り、草綠に風清き校庭に整列するや、北
條統監は音吐朗々告て曰く

兩日共に曇つて降らず霽れて暑かゞざる好天
氣なりしは諸子の爲に大に好都合ありき、特
に此好天に際し砂清く波靜かる湊安宅海邊に
二日を過したるは諸子の大に快とする所なら
む、然ども愉快を得るは決して行軍の目的に
非ず、云ふ迄も無く行軍は體操科の實地演習
にして、特に之に依りて規律を正し、忍耐を
養ふが如き精神教育を施さむと欲するなり、

先般高等學校々長會議に於て樺山文部大臣は
我輩等に依囑するに、生徒をして忍耐力を養
はしむべしと云ふを以てしたり、此の如き訓
示は時の大臣によりて多少異なる所あるも、
能く之を遵奉し、實効を擧ぐるを勉むべきは
吾人の責任なり、而して此規律忍耐等の精神
教育は體操科に依て養成さるべきものなり
職員幹部等の熱心により諸機關能く整ひ、兩
日の行軍演習は満足せる結果を得たり、前半
に比して實に著しき進歩を爲したりと云ふべ
し、されど之に満足せず益々進歩を企圖する
は吾人相互の責任あり

第四中隊中某統監部員に對して暗に不敬なる
所爲をなせしものあり云々、事小なりと雖ど
も、苟も高等教育を受くるものにして田夫婦
人と擇ぶ無きが如きは最も恥づべき所あり、
後來を誠むる爲め一言注意す

と、告示終り直に大隊の編制を脱れ、各自歸途に就きぬ (碧水)



投 書 心 待

一 投書は本會原稿用紙に限り御認めありたし
 一 長文と雖も全文を寄贈せされは掲載せむ
 一 雜誌上には雅號のみを記載することを許せども姓名は必ず編輯委員まで御報道あるべし
 一 學理上の論說諸小會の記事雅文詩歌等續々寄投ありたし勿論言の或は政治を論じ或は徳義に背くものは一切掲載致さざるべし

明治三十二年六月二十五日印刷
 全 年六月二十七日發行

編輯兼發行者

岡

八

印刷者

佐

々 木 惣 一

發行所

第四高等學校北辰會

金澤市川上新町三丁目二番地松本凌方

印刷所

活版合資會社

金澤市高岡町三十四番地

